おこうだより

特集　高知大学医学部附属病院の更なる高みを目指して

第17号　令和2年3月

高知大学医学部

おこうだより第17号　目次

巻頭言　医学部長　菅沼　成文　1

特集記事

高知大学医学部附属病院の更なる高みを目指して　医療学系長　北岡　裕章　3

血液内科学講座教授就任挨拶　血液内科学講座教授　小島　研介　4

消化器内科学教授就任挨拶　消化器内科学講座教授　内田　一茂　5

心臓血管外科学講座教授就任挨拶　心臓血管外科学講座教授　三浦友二郎　6

災害･救急医療学講座教授就任挨拶　災害・救急医療学講座教授　西山　謹吾　7

児童青年期精神医学講座特任教授就任挨拶　児童青年期精神医学講座特任教授　高橋　秀俊　8

退任のご挨拶

退任にあたって　麻酔科学・集中治療医学講座　横山　正尚　9

退任のごあいさつ　臨床医学部門教授　保健管理センター所長　岩﨑　泰正　11

新任教授紹介

着任のご挨拶　基礎看護学講座教授　関屋　伸子　13

着任のご挨拶　臨床看護学講座教授　大坂　京子　14

同窓会の取り組みについて

高知大学医学部医学科同窓会　医学部同窓会会長　廣瀬　大祐　15

看護学同窓会の役割　看護学同窓会会長　寺下憲一郎　16

学生の活動

第38回医療情報学連合大会　優秀口演賞受賞について　医学科4年生　菅田　夏央　17

全日本青少年英語弁論大会を終えて　医学科5年生　間崎　護　19

第23回日本がん免疫学会総会において若手研究奨励賞を受賞　医学科4年生　山本　快亮　21

第114回循環器学会　若手研究者奨励賞受賞について　医学科4年生　清水　元就　23

学生行事関係（写真掲載）　25

留学体験

ハワイ大学医学部プログラムに参加して　医学科3年生　田中　香　31

台湾大学留学プログラムに参加して　看護学科4年生　堀坂　侑加　33

第66回よさこい祭り　醫ーKUSUSHIー　くすし代表　医学科3年生　濵田　大我　35

第39回南風祭を終えて　南風祭委員長　医学科2年生　田村　諒太　37

課外活動紹介

医学部ハンドボール部　医学科4年生　小柴　佑太　39

ダンス部　医学科3年生　三分一所 佑輔　41

令和元年度西日本医科学生総合体育大会の成績　43

その他

平成31年度「白衣授与式」を行いました　学務委員長　渡橋　和政　44

看護学科のスチューデントナース授与式（2019年）について　看護学科長　栗原　幸男　45

「KMSリサーチミーティング」と「准講会講師派遣事業」　医学部准教授講師会副会長　杉本　加代　46

令和元度入学試験（H29～31年（令和元年）度 志願者･受験者･入学者数一覧）　48

令和元年度学生数　49

医師・看護師・保健師・助産師国家試験合格状況　50

編集後記　おこうだより編集委員会委員長　古宮　淳一　54

巻　頭　言

医学部長　菅　沼　成　文

令和の年号でお送りする最初の「おこうだより」となりました。今年も国家試験の季節が来て、緊張した面持ちの６年生諸君を送り出しました。今は試験も終わり、免許皆伝の連絡を待つのみとなりました。医師国家試験の内容は益々現場でもとめられる内容が増え、2018年から従来の３日間から２日間に短縮されています。受験した全ての合格を祈るばかりです。この「おこうだより」がお手元に届くころには、結果が伝わっていることでしょう。彼らと医療の現場や医学研究の場で共に切磋琢磨する機会を楽しみにしています。

そのような中、中国武漢に端を発した新型コロナウイルスの流行は、７万人の感染者と2,000人を超える死者を数える事態となりました。大型客船の寄港を許可した日本はその感染対策の成否を巡って世界中から注目を集める事態となりました。そうした中、隣国韓国での急速な感染者の増加、欧州諸国に帰国した大型客船乗客からの感染者の発見などパンデミックへの予兆も見られます。収束を祈りつつ、さらに広がる可能性に対して、万全の構えの中で高知県の健康危機に備えていかなければなりません。医学部医学科では３回目と看護学科では２回目の入試もそのような状況の中での実施となりました。難関を突破して、医学の世界に入門してくる将来の同僚となるべき学生達を無事に迎えられるよう祈ります。

医療は、全ての人に関わりを持っています。医学部を目指して難関に挑む受験生、講義に出席する医学生、国家試験に挑む最上級生と言葉を交わす度ごとに、私たちが素晴らしい仕事をしていることを再認識させられます。国立大学法人である高知大学医学部は、高知県の地域医療に貢献することは当然のことながら、日本に留まらず、世界の人々が「よく生きる」ことを、医学という専門知識を最大限に活用して支えることができる医師や看護師・保健師・助産師を養成しているのだということです。

「よく生きる」とはどういうことでしょうか。限りある生命をどのように使えば「よく生きた」ことになるのか。私たちは、医療という現場で学び、働き、真剣に患者さんに向き合うという局面に立たされるという他の職業にはない考える機会を与えられています。若い生命が病によって奪われれば、その不条理を受け止めることさえ難しくなります。日進月歩の医学の進歩の中で、これまで克服が難しかった病気を治癒へと導くことができる場合もあれば、医学の進歩を以てしても克服できない場合もあります。それでも、患者さんは自分の限りある生命をしっかりと使って生きていくしかありません。

「よく生きよう」とする患者さんたちに接する私たちも、自分自身の限りある人生の中で、何を果たしていくのか、どのように生きていくのかを問い続けながら、「よく生き」たいものだと思います。働き方改革法案の施行により、医師の働き方に対しての検討が厚生労働省の委員会で行われています。これまで、医療従事者の献身的な働きによって支えられてきた日本の医療ですが、医師自身も、よく生きつつ、使命を果たすことが求められています。

地域の医師偏在に対しても、国の政策として地域枠を設定し、県の貸し付け金と連動させること

によって、その対象者を経済的にも支援し、大事に育ててきています。高知大学にとって、うれしいことは、年々、非常に優秀な高校生が地域枠を選んで受験してくれていることです。彼らは全国でも注目される家庭医道場にも優先的に参加することができ、卒業後は、地域枠としては全国的にも珍しい全ての診療科を選択可能な研修体制の中で先端の医療を身に付けることができます。この地域枠卒業生が高知県の医療を支えるコアメンバーとなっていくのは間違いありません。この中から、医学生を共に教育し、先端の医療を行い、研究成果を世界に発信する医学部教授が誕生するに違いありません。

次々と新たに出現する社会の要請に対しても、敬天愛人・真理の探究という普遍的な姿勢から揺るがずに、最初に果敢に取り組んでいく高知大学医学部でありたいと願っています。皆様の応援を宜しくお願い致します。

特 集

高知大学医学部附属病院の更なる高みを目指して

医療学系長　北　岡　裕　章

大学附属病院では、従来内科と外科はナンバー講座（第一内科、第二内科、第三内科、第一外科、第二外科,など）で診療、教育されることが大部分でした。高知大学医学部も開設以来４つの内科と２つの外科で運営されてきました。この組織体制は、もちろん良いところもありますが、患者さんからその科がどういう病気を診療しているのか分かりにくいなどの欠点があったことも事実です。医学が進歩し、高度かつ専門化するにつれて、臓器別診療科/講座への流れがあります。臓器別に再編することにより、患者さんがわかりやすいだけでなく、専門家による高度かつ専門的な医療を受けることができる大きなメリットがあります。さらに診療のみならず、教育においても、各部門の責任者が今まで以上に責任をもって教育を行う体制が構築されます。今回新たに、血液内科、消化器内科、心臓血管外科を新設することになり、新教授が赴任されました。これにより、内科の診療科は、胃腸内科、肝・胆膵内科、内分泌・糖尿病内科、腎臓・膠原病内科、呼吸器・アレルギー内科、血液内科、循環器内科、脳神経内科、老年病科に、外科は、消化器外科、乳腺・内分泌外科、心臓血管外科、呼吸器外科、形成外科、小児外科、臨床腫瘍･内視鏡外科になります。同じ考えのもと、患者さんにわかりやすい形で高度な専門的医療をうけていただくため小児精神科も新設されました。

もちろん、臓器別診療科にも欠点はあります。臓器別という縦割りになると、その隙間にいる患者がたらい回しになる可能性や全人的医療が十分行えない可能性があります。そういう事態を避けるため、従来からある総合診療部に加え、災害・救急医療学講座に新しい教授を迎えることにより、救急患者の入り口で、迅速な初期診療と適切なトリアージを行い、専門性を生かした高いレベルの救急と診療科横断的な医療を展開し、横串のしっかりした医療を行うことが出来ます。それに加え、いずれ来ると予想される南海地震に向かい、高知大学医学部がどのような役割、貢献を行うのか明確なロードマップを示して参ります。

新しく赴任された教授の先生方の寄稿を拝読すると新しいエネルギーに満ちあふれています。高知医科大学の建学の精神である「敬天愛人」と「心理の探求」のもと、良い医療人を育成し、安心かつ安全で思いやりのある高度医療と先進医療を展開するための今回の組織改革であります。今後ともご支援の程宜しくお願い申し上げます。

特 集

血液内科学講座教授就任挨拶

高知大学医学部血液内科学講座　教授　　小　島　研　介

皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび令和元年６月１日付けで、高知大学医学部血液内科学講座教授を拝命いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

1991年に地元の岡山大学医学部を卒業し、同大学医学部第二内科学教室（現血液・腫瘍・呼吸器・アレルギー内科）に入局しました。派遣先の市中病院では専門分野をもたず、なんでもないか（何でも内科、現在でいう総合診療科）医として診療に携わりました。医師５年目から岡山大学病院、国立岡山病院（現岡山医療センター）、愛媛県立中央病院などで、移植医療を含む血液臨床経験を積むうち、血液内科学をより深く探求したいと考えるようになりました。血液疾患は生半可な知識で実践することが難しく、急激な経過をとり治療も困難が伴う、臨床的に過酷な症例が多いのですが、全身かつ多岐にわたる病態を総合内科医的な視点から解きほぐし、有効な治療戦略を組み立ててゆく、さらに医学・医療の進歩を第一線でふれながら、診療上の問題を医学研究にダイレクトに結びつけてゆくという、科学的臨床医にとっては遣り甲斐のある分野です。

2004年に米英の施設６ケ所に応募して、米国テキサス州立大学MDアンダーソンがんセンター（MDACC）に留学いたしました。３年目からは准教授として、造血器腫瘍におけるp53シグナル異常を標的とする新規分子治療学の、基礎から早期臨床研究まで携わりました。そこで学んだことは、何をやるか、ではなくて、誰とやるか、がより重要であるということと、多様なバックグラウンドと才能をもつスタッフの存在が、強靱な組織と実績を積み上げる原動力になるということでした。素晴らしい仲間と一緒に道を拓く経験ができたなら、苦しみは半分、楽しみは倍に、そして人生は充実したものになるものと信じております。

高知大学血液内科学講座は、内科学の一部門として1981年に開設された血液・呼吸器内科学講座（第三内科）を起源とします。初代教授である三好勇夫先生は、現在成人T細胞性白血病として知られる白血病細胞の新培養法を考案、世界初の細胞株を樹立しHTLV-Iウイルス発見に道を開きました。三好勇夫名誉教授、二代田口博國名誉教授は、岡山大学の先輩にあたります。これまで第三内科が築かれた伝統を引き継ぎ、大学、高知県の血液内科を発展させるため努力いたしますので、何卒ご指導ご鞭撻賜りますよう、お願い申し上げます。

略歴

平成３年　岡山大学医学部卒業
平成３年　岡山大学医学部　第二内科学教室入局
平成12年　岡山大学医学部第二内科　助手
平成16年　米国MDACC分子血液治療部　フェロー
平成19年　和歌山県立医科大学輸血・血液疾患治療部　講師
平成21年　米国MDACC白血病科分子血液治療部　准教授
平成25年　佐賀大学医学部血液・呼吸器・腫瘍内科　准教授
令和１年　高知大学医学部血液内科学講座　教授

特 集

消化器内科学教授就任挨拶

医学部消化器内科学　教授　　内　田　一　茂

令和元年８月１日に高知大学医学部消化器内科学に着任しました、内田一茂と申します。

私は平成４年に高知医科大学を卒業し、今回着任した消化器内科学の前身である当時山本泰猛教授が主宰されていた第一内科に入局しました。１年間附属病院で研修医を務めたあと、２年目は田野病院（院長　臼井　隆　先生）にお世話になりました。３年目からは山本泰猛教授の推薦により、天理よろづ相談所病院消化器内科のシニアレジデントとして後期研修を行い、その後京都大学大学院へ進学しました。天理病院での過去の症例を中心としてまとめました自己免疫性膵炎の臨床像の報告と京都大学大学院で行いましたIgG4関連疾患モデル動物の作成と解析をまとめ“自己免疫性膵炎の臨床的検討と動物モデルの作成”として博士号を取得しました。学位取得後は、大学院時代にヘリコバクターピロリの感染実験など消化管免疫の研究も行っていたことから、ペンシルバニア大学のGerm Free Facilityにて腸内細菌を使った消化管免疫の研究を行い、平成17年６月からは、高知医科大学時代からお世話になっていた岡崎和一教授が主宰される関西医科大学内科学第三講座（消化器肝臓内科）に移りました。

関西医科大学では、日本膵臓学会の幹事という立場から自己免疫性膵炎、IgG4関連硬化性胆管炎（IgG4関連疾患）の診断基準・ガイドラインの作成等に参画させていただき、研究ではその病態解析について行ってきました。臨床では、関西医科大学に超音波内視鏡下生検を導入し、膵疾患を中心として一般消化器内科も担当してきました。また地域医療学の准教授を併任し、三重県にある伊賀市立上野市民総合病院の消化器内科を立ち上げるとともに伊賀市の地域医療に携わってきました。大阪は、およそ20年から25年後にいまの高知県と同じ人口構造になると言われていますが、伊賀市立上野市民総合病院の患者さんの年齢構造は、まさしく高知大学医学部附属病院と同じでした。

今回25年ぶりにご縁があり高知へ戻ることとなりましたが、この高知の医療がどうなっていくのかは、全国が高齢化していく中で大きく注目されているところだと思われます。そのような意味では、とても重い責任を背負わされたと同時に、大変有意義な仕事ができる可能性があるとも思っています。高知県の医療に少しでもお役に立つことが、私を育ててくれた高知への恩返しだと考えています。

高知大学医学部は若い医療人を育成し、大学病院としての先進医療を行うとともに地域医療にも貢献していかなくてはなりません。消化器内科学（第一内科）は、歴代の先生方のご努力により肝臓病では世界的に有名な教室となりましたが、その伝統を引継ぎ大学病院として消化器難病に取り組むだけでなく、更に幅を広げ若い先生達には魅力ある研修先、そして高知県の先生方には地域の基幹病院として機能する診療科を目指していきたいと思っています。

何卒ご支援、ご指導を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

特 集

心臓血管外科学講座教授就任挨拶

医学部心臓血管外科学講座　教授　　三　浦　友二郎

この度2019年11月より静岡病院　心臓血管外科医長より高知大学心臓血管外科学講座教授に就任致しました。何卒よろしくお願い申し上げます。

東京で生まれ育ち、高校卒業後は横浜市立大学に入学し、サッカーに明け暮れた大学生活では人間関係の大切さを学びつつ、厳しい勝負の世界も経験し在学中に心臓血管外科に進むことを決意しました。卒業後は東京の三井記念病院で計６年間、外科・心臓血管外科専門研修を終え、更に症例が豊富な静岡市立静岡病院　心臓血管外科で5年間多くの臨床実績を積みました。しかし、毎日手術に身を置くことでさらなるスキルアップを目指し、ドイツ・ザールランド大学胸部心臓血管外科に臨床留学し、同科を主宰するシェーファース教授と約1000例の手術に参加することができ、ドイツ医師免許取得後は執刀の機会も多く得ることができました。

彼は大動脈弁形成術の世界的権威で、大動脈弁閉鎖不全症を患う若年患者さんに対して人工弁置換術を回避する画期的な手術だけでなく、全ての手術で無駄のない正確で短時間の手術により、困難な患者さんが元気になるのを多く経験できたのは外科医としての正に「 break through 」でした。

帰国後、再び静岡病院　心臓血管外科医長としてドイツで学んだ大動脈弁形成術のみならず、冠動脈、弁膜症、大動脈疾患など全領域で多くの症例を執刀・指導しました。在籍した4年間に400例を超える症例に対して、安全で再現性のある外科治療を実践し、それらの豊富な症例をまとめ、全領域で多くの臨床研究を発表し、自分たちの治療の妥当性を再検討し、フィードバックを行ってきました。

振り返ると手術能力向上を第一に考え、外科医としての発展を目指して参りましたが、これは高齢化・重症化する多くの患者さんをより安全に早期に元気にすることができる一番の方法と考えます。しかし、このような良い経験ができたのは、多くの「メンター」と医療スタッフの支えのお陰だと心から感謝しており、これからは医療での地域貢献と外科医の育成で恩返しをしたいと考えています。心臓外科疾患はひとたび病気になると昼夜・休日を問わず緊急手術になることが多い領域です。「断らない医療 / no refusal policy」を今後も実践し、不安にかられるご家族にも「高知大学に運んでもらえればひと安心」と思ってもらえるよう信頼される施設を目指します。

高知県は全国有数の超高齢社会であります。増え続けるハイリスク症例を安全に手術し、なおかつその効果を長期的に持続させて生命予後を改善し、真に患者さんのための最適な方法を柔軟に選択するため、心臓血管外科医、循環器内科医、そして麻酔・集中治療科のみならず看護師、臨床工学士、理学療法士やソーシャルワーカーを含めたハートチームを構築してゆきます。医学の進歩と共に、ますます複雑化、交絡化する病態に細やかに対応するテーラーメード医療として、「患者ファースト」の精神は揺らぐことなくブレない医療を実践していきます。高知大学の発展、高知県の心臓血管診療の向上に貢献できますよう教室員とともに勤めてまいります。今後とも温かいご支援を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

特 集

災害・救急医療学講座
教授就任挨拶

災害･救急医療学講座　教授　西　山　謹　吾

高知県の寄付講座で平成23年10月に故・長野修先生を迎えて高知大学に災害・救急医療学講座が初めて設けられました。その講座は平成31年３月31日に終了いたしました。その後高知大学が独自に災害・救急医療学講座を開設し令和元年８月に私が着任しました。災害・救急医療学講座という名前はまだあまり浸透していないかもしれませんが、高知県にとっては大切な講座になります。

私は高知医科大学の１期生で、本校の奥谷・小林・瀬尾・高田・藤枝・溝渕教授と同期になります。昭和59年高知医大卒業後、平川方久教授の麻酔科に入局しました。その時の直近の先輩が現麻酔科学集中治療医学教授の横山正尚先生で、一緒に外勤に行ったり当直したり楽しく研修時代を過ごさせてもらいました。一方大学院では生物学の内海耕慥教授のご指導を受け活性酸素の研究を行いました。平成６年に高知赤十字病院救命救急センターに移り、以後約25年間高知赤十字病院で災害医療と救急医療に携わってきました。

ここで災害医療についてお話しさせていただきます。1995年の阪神淡路大震災をきっかけに、日本の災害医療は大きく様変わりしてきています。それまで災害救護といえば日本赤十字社が活躍していました。しかし救命という観点からみると発災から24時間以内に現地に入る迅速性が必要なことが分かり、2005年に日本DMAT（Disaster Medical Assistance Team）が発足しました。現在ではいろいろな医療団体がいち早く現場に駆け付けるようになりました。

災害現場で活動するのは医療チームだけではありません。自衛隊や消防、警察、行政にとどまらず、いろいろなNPO団体など様々です。それらが別々に行動しては効率が上がりません。災害時に大切なのは他団体と協調して動くことで、そのためには災害の枠組みを理解することです。当講座では災害時の指揮命令系統を理解し、一番効率の良い保健医療活動を展開できる医療人を育成していきます。災害時の患者は外傷患者だけとは限りません。特に避難所では早期から保健医療活動の視点を持たなければいけません。避難者は実は災害一日目からいるのです。そして東日本大震災・熊本地震では災害関連死を予防することの重要性が注目を集めました。エコノミークラス症候群や感染症予防、生活不活発病の予防で脳梗塞心筋梗塞などを減らしていく必要があります。

こうして考えると、従来の臓器別講座では立ち行かなくなることが分かると思います。外傷疾患から内科疾患、さらには保健予防活動に対する理解が必要です。まず普段の救急医療で老若男女、外傷や内因性疾患の診療に慣れておく必要があります。そして災害時には医療資源が制限された中での医療展開をしなければいけません。そして様々な団体とコミュニケーションをとっていかなければなりません。これができるようになる人材を育成することが災害・救急医療学講座の存在価値だと思っています。南海トラフ地震が目の前に控える高知県にとって、なくてはならない講座を目指して日本全土に発信していきたいと思っています。

特 集

児童青年期精神医学講座 特任教授就任挨拶

児童青年期精神医学講座　特任教授　　高　橋　秀　俊

このたび、平成31年４月１日付で高知大学医学部寄附講座児童青年期精神医学特任教授に就任いたしました。何卒よろしくお願いいたします。

私は、兵庫県私立甲陽学院高等学校、東京大学工学部土木工学科を卒業した後、大阪大学医学部医学科を卒業しました。その後、大阪大学医学部精神医学教室に入局し、大阪大学大学院博士課程医学系研究科で医学博士を取得しました。大阪で仕事をしていた10年は、統合失調症・発達障害の神経生理機能・認知機能に関する研究に従事しながら、精神科診療に関する幅広い経験を積み、精神保健指定医、日本精神神経学会専門医／指導医、日本児童青年精神医学会認定医、子どものこころ専門医を含め精神科に関する様々な資格を取得しました。この頃から一貫して、精神障害の情報処理機能と社会機能との関連ならびに多職種地域連携に基づく支援体制整備が私の研究テーマの中心です。高知大学医学部附属病院では子どものこころの診療部の専門外来を担当しておりますが、子どもが心の問題を抱える場合、ご家族も心の問題を抱える場合も多く、これまでの幅広い経験が役に立っております。

その後、カリフォルニア大学サンディエゴ校精神医学教室で海外研究に従事し、平成23年２月より国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所　児童・思春期精神保健研究部　室長に就任、平成26年４月より国立精神・神経医療研究センター脳病態統合イメージングセンター先進脳画像研究部　室長も併任し、自閉スペクトラム症など発達障害の聴覚過敏に関する研究や、医療 - 教育連携、発達障害の就労支援、過疎地域の発達障害支援、災害時の子どものこころのケアなどに従事しました。発達障害の聴覚過敏に関する研究は、発達障害を有する当事者や家族が社会生活を営む際に抱える困難さを周囲が理解しやすく表現するもので、マスコミなどでも何度か取り上げられ、最近では映画館やスーパーマーケット、サッカー競技場などの社会生活空間での感覚に優しい（sensory friendly）取組へと発展し、感覚過敏の方でも快適に安心して社会生活を営めることが期待されています。

このたび、大阪大学医学部精神医学教室の先輩である數井裕光先生が平成30年１月に高知大学医学部神経精神科学講座教授に就任され、その御縁で平成31年２月に高知大学医学部神経精神科学講座の特任准教授に就任後、現職に就任しました。高知大学医学部寄附講座児童青年期精神医学は、自治体が開設した児童精神科に関する寄附講座として我が国で６番目です。子どものこころの診療では、子どもとその家族の多様なニーズに応じて、地域の特性を踏まえ医療・福祉・教育など幅広い領域が連携し、ライフステージを通した切れ目のない支援が不可欠です。児童精神科医の確保は我が国では喫緊の課題で、本講座では医学部や高知地域医療支援センターと連携し、地域の子どものこころの診療に長く責任をもって関わることができる人材の育成を行い、児童精神科診療体制整備のモデルになることが期待されています。皆様のご指導、ご鞭撻ならびに温かいご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

《退任挨拶》

退任にあたって

高知大学医学部麻酔科学･集中治療医学講座　横　山　正　尚

平成21年５月より高知大学麻酔科学・集中治療医学講座に３代目教授として赴任いたしました。高知は高校卒業まで過ごした故郷ですし、岡山大学卒後３年目に当時の高知医大附属病院の開院と同時に一度目のUターンを致しました。８年間ほど高知医大に籍を置いた後、米国留学を経て再び岡山大学の方で勤務し、19年ぶりに二度目のUターンをしてから早くも11年が過ぎようとしています。

振り返ってみれば、１年間だけ香川県立中央病院で勤務した以外は岡山大学、高知大学、そしてカンザス大学と40年間をほぼ全て大学で過ごした現役生活でした。この間、大学は独立法人化され、統廃合を強いられ、特に医学部では卒後研修医制度の大改革がなされ、医療技術が飛躍的な進歩をとげるとともに生命倫理が大きく変化した時代でした。医学のみでなく、社会そのものが大変革を起こした時代で、天安門事件、ベルリンの壁の崩壊、イラク戦争、アメリカ同時多発テロ、その後に続く民族間対立、宗教紛争の激化。さらにはIT革命とグローバル化に伴うマネーゲームと格差の二極化、そして環境危機が叫ばれる時代に人類は突入しています。身の回りでもバブルの絶頂期に卒後を迎え、その後のバブル崩壊と経済の低迷、そして少子高齢社会が加速度的に進む中で医療に携わってきました。環境の大変化と繰り返される自然災害の中、明確な社会そして医療制度の将来像が見えない令和という時代の入り口で退任となりました

そのような社会情勢の中、大学人の終盤としての高知での生活は試練でもあり、勉強の日々でもありました。卒後研修医制度の改革で地域の研修医が激減し、崩壊の危機が訪れていた教室の建て直しは待ったなしの課題でした。教室員の獲得は教育、臨床、研究のレベルアップを通じてするしかないとの本質に基づき、がむしゃらに走ってきた感があります。教室員の増加に伴い、手術症例数の倍増、集中治療室の専従と夜勤体制の確立、疼痛・緩和部門の充実、そして県下の公立病院への派遣も可能となりました。論文、科研費獲得は大学として恥ずかしくないレベルに押し上げ、3,000人規模の国内学会および30カ国以上の参加を得た国際学会の主催、さらに海外留学派遣も成し遂げたことはうれしい限りです。ここまで支えてくれた教室員一同にまずは深く感謝したいと思います。

赴任当時、教室だけでなく、大学も大きな問題を数多く抱えていました。様々な仕事に関わったことが、ある意味、晩年の現役生活に生きがいを与えてくれました。まず、何と言っても救急部の立ち上げが大仕事でした。実質上、全く機能していなかった救急部を稼動させなければならない状況に大学も置かれていました。各科に頭を下げ、地域の消防に挨拶回りをしたことが懐かしく思われます。県の寄付講座として災害・救急医療学講座を開設するための活動は、県の医療行政や地域医療を勉強するきっかけとなりました。新卒の国試合格率が80%を下回るという大激震のもと、医師養成強化対策チームの座長を仰せつかったことも、教育という課題に本気で取り組ませて頂いた契機となりました。大学の教員として、それまでは臨床および研究に重きを置いていた自分自身の生活が、教育の質の向上にかなりの比重を置くようになったことは、後の教員生活での大きな収穫

となったと今でも感謝しています。

大学病院が臨床、研究、教育に加え、独立法人化に伴い経営のことを第一に考えなければならなくなったのも大きな時代の流れでした。経営問題は全国どこの大学病院でも大問題ですが、高知には多くの特殊性があることをあらためて勉強することができました。高齢化が顕著で、人口減が一気に進み、中央部に急性期病院が密集し、医療が基幹産業として地域経済を支えていた地域では、経済学的観点からもその構造を変えなければならないことは明確です。何を如何に変革するかをいち早く示し、その解決に取り組まなければならない義務を大学病院は抱えていることを学ばせて頂きました。それらを通じて、今後の第２の人生では、夢である国際貢献とともに地域連携および組織マネジメントに寄与することが最大の課題になると考えています。赴任後、医療安全管理副病院長ならびに地域連携副病院長を歴任させて頂いたことも感謝しかありません。この業務に関わった院内の多くの方や他施設の関係者にも深くお礼申し上げます。その延長として、最後は医療の質向上委員会の責任者を任されましたが、今まさに医療の本質が問われている時代です。ともすれば経営が前面に出ますが、医療の原点をもう一度見直すことが信頼の得られる大学病院に求められている時代です。

教授としての在任期間は11年と短いものでしたが、この先も故郷高知への恩返しはしなければならないと思っています。講義や実習のサポートはもうしばらく続ける予定です。高知へ赴任後立ち上げた麻酔科学関係の学会も会員数が2,000人規模となり、国際的な繋がりにも発展しました。その責任者として学会の事務局運営の責任もあります。うれしいことに他の国内外の学会でも役員を数年間は依頼されているので、国際交流や研究関係には現役として関与できます。せいぜいぼけないように頑張りたいと思います。

今後もご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。皆様方のご健勝とご活躍をお祈りいたします。

令和2年1月吉日

退任のごあいさつ

臨床医学部門教授　保健管理センター所長　　岩　﨑　泰　正

令和という節目の時代における初めての退官教授として、ここに退任の御挨拶を申しあげます。

私は東北大学を卒業後、虎の門病院内科レジデントとして前期3年間、名古屋大学第一内科および関連・施設・病院で20年間（留学期間を含む）勤務した後、縁あって高知大学に移籍し、内分泌代謝・腎臓内科講師・病院教授および臨床医学部門教授・保健管理センター所長として16年間奉職させて頂きました。なんとか無事に職務を全うすることが出来ましたのも、皆様の御指導・御鞭撻の賜物と、心より御礼申し上げます。

田んぼの畦道でカエルの卵からオタマジャクシの成長を眺めつつ田舎の小学校に通うような学童期を過ごした私にとりまして、高知の豊かな自然は肌に合うとことが多く、美しい空気や多彩な食材、奥深い歴史を楽しみ、そして何より人情豊かな大学内外の方々に囲まれつつ、本当に心豊かな生活を過ごすことが出来ました。またオーケストラ奏者としての活動を通じた学生との交流も楽しみでした。

高知大学では、最初の数年間は第二内科の橋本浩三名誉教授の御指導のもと、臨床・研究・教育を思う存分堪能致しました。橋本先生は「研究をしたい医局員には自由にやりたいことをさせる」という視点で医局を運営されておりましてので、内分泌グループでは医局員のみならず他大学からの国内留学生、そして中国佳木斯大学からのよさこいプロジェクト研究生・国費留学生など多くの若手研究者を指導させて頂く立場となりました。結果的に、各先生が御自身の手で実験を行い、内分泌領域の最高峰である「Endocrinology」、糖尿病領域のトップジャーナルである「Diabetes」など、第二内科の歴史に残る素晴らし論文を世に出してくださいました。本当に研究指導者冥利に尽きる５年間でした。

朝倉に教授職を得て移動してからは、第二内科医局における研究活動の継続が困難となりましたので、大学病院での診療（内分泌・甲状腺、指定難病など）を行う傍ら、理学部の一角をお借りして研究活動を継続し、同時に多数の学会の筆頭理事・理事、幹事、評議員などを務めることになりました。結果的に多くの全国学会の会長を任されることにもなり、2014年には日本神経内分泌学会会長、2016年に日本間脳下垂体腫瘍学会副会長、2018年に日本下垂体研究会会長（その他の小規模研究会の会長多数）を務めました。さらに昨年秋には日本内分泌学会秋季全国大会（臨床内分泌代謝Update）を高知市で開催いたしましたが、過去最大（約1800名）の参加者を得て盛会裏に終了し、高知の魅力を全国の皆様に堪能して頂くことが出来ました。地方都市でも、やればできるということを実感すると同時に、学会が終わった後に参加者から「高知ロスの毎日です」という御礼状を頂きましたときは、本当に涙の出る思いでした。高知大学医学部における研究環境は日に日に厳しさを増しておりますが、是非これからも大学を挙げて素晴らしい業績を積み重ねつつ高知の魅力を発信し、櫻井学長の仰るSuper Regional Universityとして高知大学の存在感を高めて頂きたいと念願いたしております。

残念ながら、私の力不足により、ここ10年間は大学の内分泌グループに新人教官の補充が無く、一方で立派に成長した若手・中堅の先生が巣

立ってゆかれる状況から、本年4月からの内分泌グループは医局内に１名のみとなり、それを外部の先生が外から支える状況が続きそうです。特に一般医療機関で診療困難な甲状腺疾患の専門医不足は深刻で、大学病院における認定施設としての存続にも関わる問題です。私自身は退官後、週の大半を東海地区の研究施設で過ごし、科研費を用いた研究や教育を継続する予定ですが、一方で藤本教授の御配慮により、老体に鞭打って毎週名古屋から通い、月曜日に甲状腺外来を継続させて頂くことになりました。高知大学に於かれましては、今後5～6年の間に、内分泌・甲状腺の専門医を取得して外来診療の後継者となる若い先生が現れるよう、人材の育成を切にお願い申し上げる次第です。

《新任教授紹介》

着任のご挨拶

基礎看護学講座教授　関　屋　伸　子

この度、令和元年８月１日付で高知大学教育研究部医療学系看護学部門基礎看護学講座教授に就任いたしました。何卒よろしくお願い申し上げます。

私は助産師として宮崎医科大学医学部附属病院（現宮崎大学医学部附属病院）において出産や女性特有の疾患に対する看護について臨床経験を積んだのち、大分県立看護科学大学、東京医療保健大学において母性看護学・助産学領域の看護学教育に携わってまいりました。私の研究テーマは、「安心・安全な出産のための支援」であり、九州大学大学院医学系学府保健学専攻博士後期課程において行いました分娩予測モデルの開発に関する研究を主たるライフワークとしています。また、妊娠や出産にかかる母子への支援や産後うつなどの周産期のメンタルヘルス・ケア、若年女性の子宮頸がん予防教育、看護学教育など種々の研究テーマについて院生や副指導教員の皆様と一緒に取り組んでいます。

私は看護学部門において専ら大学院修士課程における助産学教育に携わっております。我が国の助産師教育は、1874（明治７）年８月に発布された医制で産婆に関する規定が示されたことにはじまり、現在は大学院、大学専攻科・別科、大学（助産師・看護師統合カリキュラム）、短期大学専攻科、養成所と様々な教育機関において展開されています。高知大学は2011（平成23）年に国立大学では先んじて大学院修士課程における助産師育成を開始しました。2018（平成30）年には大学院の助産師教育課程を有するものは全国で39校（18.8％）となり年々増加を示しています。看護学部門の諸氏の先見の識とご尽力によって、次代を担う先駆的な助産師の育成課程が実現したことは進取の精神に富む高知県の郷土文化ならではと考えます。

近年、我が国では超少子高齢化や多様な価値観の広がりを背景として、生涯未婚率の増加や核家族の増加や地域とのつながりの希薄化による子育ての孤立化、児童虐待など母子を取り巻く深刻な社会的課題が山積しております。助産師の役割は常に女性や子ども、その家族とともに存在し、安全で安心な妊娠・出産・子育てを支え、女性の生涯にわたる健康を支援することです。女性の晩産化は不妊やハイリスク妊娠の一因とされており、助産師にはより高度かつ、確実な実践能力が求められております。本学では、大学院実践助産学課程開設以降、「アウトリーチ型過疎地域体験プログラム【助産道場】」を地域に根差した視座を持つ助産師育成の取り組みとして実施しています。これは学生が地域住民に喜ばれ、必要とされる存在としての体験を通して助産師としての成長を涵養することを目的とした工夫の一つです。今後も一層研究及び教育の充実を図り、地域社会に広く貢献し、高知県の母子保健の向上にも寄与できるよう努めてまいります。何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

臨床看護学　教授　　大　坂　京　子

令和元年８月１日から高知大学医学部看護学科臨床看護学講座・精神看護学領域教授に就任いたしました大坂京子と申します。

簡単ではございますが、自己紹介をさせて頂きます。

大学を卒業後、出身地の徳島で脳外科病棟看護師として３年間、単科精神病院で２年間勤務いたしました。仕事と並行して大学院博士課程に所属し、「脳波を用いた共感的理解に関する研究」で博士号を取得いたしました。

大学院修了後は、高知県で大学の助教として研究者の一歩を踏み出しました。

これまでに行ってきた研究は、認知症を抱える高齢者へのケア、病院および高齢者施設におけるコミュニケーション・ロボットを用いた認知症高齢者および統合失調症患者への影響の実証試験、ロボットを活用する際の看護師の介在者役割の明確化、看護におけるケアリング理論の翻訳、精神科病院におけるクリニカルパスシステムの開発に関する研究です。

研究成果については国際学会での口頭発表を行ったり、英文のジャーナルに投稿してきました。

高知大学着任後の11月にはフィリピンのアワー・レディ・ファティマ大学、セブ教育大学で開催された看護の国際学会で「ケアリング・ロボットを活用する際の看護師の介在者役割」と題して講演をさせて頂きました。緊張いたしましたが、これまでに行ってきた研究成果を海外で発信する機会をいただき、大変光栄でした。

これまで、上司・同僚の先生方、家族の協力を得て研究活動を行ってきました。これからも、子育てをしながら教育・研究を行う女性の役割モデルを示していきたいと思います。

研究でも多くの恩師や同僚、共同研究者に恵まれております。今後は研究室運営を行う上で、学際的連携による共同研究のリーダーシップが取れるように努力したいと存じます。

精神科看護では精神症状と共に、患者を身体・心理・社会的にあらゆる角度から判断し、対応する技術力が求められています。特に、入院患者の高齢化が著しく、併存疾患を有する患者が増加しており、精神科だけでなく関連診療科の協力も得て看護する必要性が高まっています。そのため、学部教育においては総合的にアセスメントできる能力を身につけることができるように教育を行っていきたいと思います。

精神科で勤務する看護者の現任教育は、医療や看護の質を担保するために必須です。専門職として高度な技術やケアリングの理論に基づいた思いやりのある看護を提供できるように外部の精神科病院とも連携しつつ、現任教育のお手伝いをさせていただきたいと思います。

また、専門職としての看護を発展させるためには大学院教育が重要です。看護を科学として発展させるために、臨床現場とも連携しながら大学院生と研究を行いたいと思います。

高知にはご縁があり、二度目の赴任になります。若輩者でございますが、高知大学の教育、そして高知県の医療の質向上に貢献できるように努力する所存でございます。

ご指導・ご鞭撻賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます

《同窓会の取り組みについて》

高知大学医学部医学科同窓会

医学部同窓会会長　廣　瀬　大　祐

昔から、大学の医師の仕事は臨床・教育・研究と言われてきました。それは市中病院も同じで、程度の差はあれ、一般診療の他に後期研修医（専門医取得のため）の教育や学会発表があります。現在ではそれに加えて２つの責務が存在すると思います。介護・地域への関わりです。特に地域への関わりは、人口減で萎縮する地域において、必要な医療、残すべき医療資源を精査し支えることが求められています。このような大学の責務を支えることも同窓会の役割の一つと考えます。

2021年には附属病院も開院４０周年を迎えます。４０周年事業に向けて同窓会も最大限の協力を行っていきたいと考えております。

昨年の同窓会事業として令和元年8月3日(土)、ホテル日航高知旭ロイヤルにて医学部同窓会総会を櫻井高知大学長、菅沼医学部長のご出席のもと開催いたしました。平成30年度会計報告と令和元年度事業計画に伴う予算の説明を行い、前田監事から平成30年度会計監査の結果、適正に処理されていることの報告がありました。講演会では、二神先生(16期生)を講師として「断酒会員の内科医が語るアルコール依存症」をテーマに興味深いご講演をいただきました。

平成30年度事業から学会等を主催する場合に同窓会から支援することとなり「日本味と匂学会」「日本消化器がん検診学会」「日本小児腎不全学会」の3学会の活動について支出をいたしました。今年度も継続して支援をいたします。

総会・講演会終了後は、櫻井高知大学長よりお言葉をいただき、菅沼医学部長の乾杯のご発声のもと懇親会が開催され、旧友と懇談後、来年度の再会を誓って懇親会は終了となりました。

なお、今年度同窓会総会は、令和２年８月２２日(土)にホテル日航高知旭ロイヤルで開催することとしております。特に、第７期生(平成２年卒業、卒後30周年)、17期生(平成12年卒業、卒後20周年)は周年となっておりますので、同窓会総会、懇親会に是非お集まりください。近くなりましたら改めてご案内をさせていただきますので、皆様、奮ってご参加ください

看護学同窓会の役割

高知大学看護学同窓会会長　寺下　憲一郎

看護学同窓会は平成19年４月１日に発足し、高知医科大学から始まった看護学科が、今は高知大学の看護学科として多くの学部・修士の卒業生を輩出しております。

現在、学部卒の同窓生数は平成30年度で1,218名となり、修了生においても180名を超える方々がご卒業され、様々な場においてご活躍をされています。このような数多くの同窓生に対して、看護学同窓会は会員相互の親睦を図り、福利厚生や高知大学の発展に協力することを目的とし活動をしております。

在学生に対しては「学生サークルへの寄付支援」「よさこい、大学祭への寄付」「卒業・修了記念品贈呈」を行っております。その他にも、卒業生・修了生に対して行っている「同窓生への研究支援」などがあります。「同窓生への研究支援」においては、「桜基金」を立ち上げ、研究費を支援したり、高知大学医学部看護学科で開催される講演や研修に共催することで同窓会への参加をご案内しております。

まだ、「桜基金」をご存じない方もいるかと思いますが、今後も同窓生の研究活動等の支援をしていきたいと考えておりますので、ぜひホームページや、新たに開設いたしましたフェイスブックもご覧にいただき、ご連絡を頂ければと思います。

また、同窓生と在学生との親睦会の開催も３回目となりましたが、今年度も台風によって大学祭初日が中止となってしまい、開催が危ぶまれる中31名の参加者に来ていただきました。

少しずつではありますが、今後も同窓生と在校生との縦と横のつながりが強く大きくなっていくように活動していきたいと考えています。

看護学同窓会の発展のために、今後とも高知大学教員の皆様をはじめ、同窓生、同窓会連合会の先輩方など多くの方からご支援を賜ります様、よろしくお願いします。

同窓生・在学生からのご意見お待ちしています。
同窓会HP：http://www.kango-doso.com
E-MAIL：kangodoso@kochi-u.ac.jp
Facebook：
https://www.facebook.com/kms.nurse/

Facebookでは、看護学科の行事を随時アップしていきますので「いいね！」をしていただければ幸いです。

2019年度　第13回 同窓会総会にて

《学生の活動》

第38回医療情報学連合大会　優秀口演賞受賞について

先端医療学コースデータマイニング班　医学科4年生　　菅　田　夏　央

このたび、平成30年11月22日から25日にかけて、福岡で開催された第38回医療情報学連合大会にて、「病院情報システムのデータを用いた経口血糖降下薬併用パターンと治療成績の関係の網羅的探索」という演題で口演発表を行い、優秀口演賞を受賞しました。

２型糖尿病の治療法は生活習慣の改善から行われますが、血糖コントロールが不十分である場合に経口血糖降下薬（OHA: Oral Hypoglycemic Agents）が使われます。単剤で血糖コントロールが難しい場合に併用療法が試みられますが、どの薬剤の組み合わせが良いのかという明確なエビデンスはありません。このため、本研究では実際の臨床の場で処方されているOHAの併用パターンを投薬前の検査値などに基づく様々な病態の違いに考慮しながら、治療成績との関係を網羅的に探索し検討を行いました。

対象としたのは、本学附属病院の病院情報システムにおける1981年から2016年の匿名化されたデータのうちOHA処方患者の処方前のHbA1c値および最終処方前三ヶ月以内のHbA1c値が存在する3762人を対象としました。最終処方以前２ヶ月のHbA1c平均値が、糖尿病患者の血糖コントロールの目標値である7.0%未満の場合を薬剤の効果ありとし、データ解析を行いました。解析方法は、決定木、アソシエーション分析、ロジスティック回帰分析を用いました。

経口血糖降下薬は、作用機序により分類される７種類が存在します。本研究では、７種類のうちスルフォニル尿素薬（以下SU）とDPP-4阻害薬（以下DPP-4I）の二剤に着目し、SUを投与されている患者(SU処方群)にDPP-4Iを投与する場合は血糖コントロールに有意な効果が見られ、それに対してDPP-4Iを投与されている患者（DPP-4I処方群）にSUを追加投与する場合は血糖コントロールに効果がないことがわかりました。

今回の結果は、SU、DPP-4Iそれぞれの作用機序を考えることで解釈可能であります。膵β細胞には血中グルコースがインスリン分泌を引き起こす経路（惹起経路）とインクレチンが分泌を増幅する経路（増幅経路）が存在します。惹起経路は、血中グルコースを代謝してATP産生し、ATP依存性KチャネルK_{ATP}が閉鎖して細胞膜を脱分極させ、それにより活性化する電位依存性Caチャネル(VDCC)の影響により細胞内Ca^{2+}濃度が上昇してインスリン分泌を惹起する経路です。一方、増幅経路は、インクレチンがATPをcAMPに変え、cAMP細胞内濃度上昇により活性化されるプロテインキナーゼA(PKA)が細胞内Ca^{2+}によるインスリン分泌顆粒の開口放出を促進する作用やCa^{2+}易動性促進による細胞内Ca^{2+}濃度の上昇、K_{ATP}およびVDCCへの作用を介してCa^{2+}流入が促進すること、PKAとは独立にcAMPにより活性化されるEpac2(cAMP-GEFⅡ)がCa^{2+}によるインスリン分泌顆粒開口放出を促進することなどが合わさってインスリン分泌を増幅させる経路です。

SUは惹起経路を誘導し、DPP-4Iは増幅経路を誘導する薬です。つまり、SUはK_{ATP}を閉鎖することで細胞膜の脱分極を促し、インスリン分泌を促進しますが、インクレチンはSUによって開始されたインスリン分泌を、cAMP濃度の上昇を介してグルコース濃度依存的に増強します。このためSUにより細胞内Ca^{2+}濃度が上昇していると考えられるにもかかわらず効果が得られない場合は、インスリン分泌顆粒放出の仕組みに問題があると考えられますが、DPP-4Iを服用すると、Ca^{2+}に

よるインスリン分泌顆粒開口放出を促進する効果によりインスリン分泌が増強し、血糖コントロールに有効に働くと考えられます。

学会では、レベルの高い議論が繰り広げられ、本研究の弱点や改善点を指摘され、学びの多い経験となりました。受賞がゴールではなく、この経験を活かして今後もさらなる研究に励む所存です。

末筆になりましたが、今回の発表に際しましては、奥原義保教授をはじめとする医療情報センターの皆さまに多くのご指導とお力添えを賜りました。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。有り難うございました。

全日本青少年英語弁論大会を終えて

医学科5年生　ESS副部長　間　崎　　護

みなさん初めまして、医学科５年の間崎護と申します。私は、令和元年６月にECC主催で開催された全日本青少年英語弁論大会大学の部にて優勝させていただき、今回筆をとらせていただくことになりました。

まず初めに今回の出場に際して、お忙しい中、協力してくださった菅沼医学部長、安光さんをはじめとする環境医学教室の皆様、英語教員のDaniel Ribble先生、そして５年間ESSの同期として、友人として僕を支え続けてくれた川島くん、皆様にこの場をかりて深く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。僭越ながら今まで何度か、様々な英語弁論大会に出場させていただいてはおりましたが、今回のような大規模な試合への参加は初めてで、右も左もわからないまま、周囲の人に支えられて、栄誉ある賞をいただくことができました。

今回私は“自殺問題”という大きなテーマに挑みました。７分という短いスピーチ時間の中、それをどうまとめ、何を聴衆に伝えるべきか、推敲を重ねました。自殺という、非常にセンシティブなトピックでしたが、だからこそ黙認するのではなく、あえて口に出し議論する機会を届けたい、というのが私の気持ちでした。もちろんなんらかの事情や過去がありそれについて口に出すことが憚られる方たちに議論を強要するつもりは毛頭ありませんし、そうすべきではありません。しかし日本では毎年24,000人の方が自ら命を絶っているのにもかかわらず、およそ7割の国民が自殺問題は「自分と関りがない」と感じているのです。これは自殺問題に関心のある人、自殺問題と身近に接したことのある人と、そうでない人との溝が深いことを示唆しています。そして自殺は“伝染する”こともわかっています。家族や友人に自殺をした方がいる場合、そうでない人に比べて、自分も自殺念慮を抱いたり、自殺未遂をする確率が高いことが知られています。私の願いはこの二つの集団の隔たりをなくすことです。自殺問題について考えたこともない方に、なんとなく自殺問題について話すことを遠慮してきた方に、少しでも関心をもってもらいたいのです。もちろん自殺についてトラウマを抱える人に配慮することはとても大切です。しかし関心も持たずただ黙っていることと、配慮することは全くの別物です。「自殺について話すのもなんかタブーみたいな雰囲気だし、考えるのも気が滅入るからやめとこう」、と思う方も多いと思います。ですが、問題を解決することの第一歩は、まずその問題がそこに存在する、ということを認識することから始まります。自殺問題はとても複雑で、それを一朝一夕に解決できるとは思っていません。ただそこに解決すべき問題がある、ということを皆さんに知っていただきたいのです。

私は決して外向的な人間ではありません。３年前のおこうだよりでも書かせていただきましたが、

スピーチをするときは、「もしかしたら相手にされないかもしれない」、「拒絶されてしまうかもしれない」、そんな不安や恐怖を乗り越えなければなりません。私は一人でそれを乗り越えられるほど強い人間ではありませんでした。しかし周りの友人、先生方に支えられてここまで来ることができました。少しでもお世話になった人に恩返しできるよう、これからも精進して参ります。最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。

ECC

CERTIFICATE

June 16, 2019

This is to certify that Mr. Mamoru Masaki, representing Kochi University, Shikoku District, has been awarded the Grand Prize in the University Category of the 49th All Japan Youth English Oratorical Contest for the Mayor of Honolulu Trophy under the auspices of

ECC FOREIGN LANGUAGE INSTITUTE
ECC KOKUSAI COLLEGE OF FOREIGN LANGUAGES
ECC JUNIOR/BRANCH SCHOOLS.

Judges: Kiyotaka Sagoshi, Paul M. Kelley, Kazuhiro Nomura, Eiko Mato, Mon Ma

Mayor, City and County of Honolulu

Masahiro Kanafusa
Chairman of the Contest

第23回日本がん免疫学会総会において若手研究奨励賞を受賞

先端医療学コース　ペプチドワクチン研究班　医学科4年生　　山　本　快　亮

この度、2019年８月21日(水)～８月23日(金)に高知県で開催された第23回日本がん免疫学会総会において、「Cross-presentation by ECs augments anti-tumor responses in targeting a natural tumor antigen in prostate cancer（血管内皮細胞による腫瘍抗原のクロスプレゼンテーションが、前立腺がんに対する抗腫瘍活性を高める)」という演題で発表させて頂き、若手研究奨励賞を受賞しました。

本学では「先端医療学コース」を選択し、大学の各研究室に所属して先生方から専門的な指導を直接受けながら、医学研究に取り組むことが可能です。私は二年次より「ペプチドワクチン研究班」に所属し、そこでの約三年間の研究成果を今回発表させて頂きました。ここでは演題で発表した内容に関して簡単にご紹介させて頂きます。

本研究では、腫瘍抗原として核タンパクSNを標的とした免疫療法の開発を試みました。SNは体細胞にユビキタスに発現されるタンパクで、前立腺がんおよび固形腫瘍の大半で高発現されます。まずSNのアミノ酸配列内でヒト白血球抗原分子であるHLA-A*24:02に提示されるペプチドを同定し、それを認識する細胞傷害性T細胞(CTL)を誘導できるかどうか試しました。その結果、アジュバントであるCpGと共にミセル溶剤に溶かしてペプチドを免疫することにより、生体内で長期にわたって働くCTLを誘導できることが分かりました。さらにマウスに前立腺がん細胞を植え、ペプチド特異的なCTLを養子移入する、またはペプチドを免疫することにより腫瘍を縮小することができるかどうかを調べました。すると、ペプチド特異的なCTLの増加に伴い腫瘍の縮小が見られ、その反応は前立腺がんの治療に使われるホルモン療法剤であるCEM（enzalutamide)に加え、血管内皮細胞および樹状細胞の抗原提示能力を促進する薬剤と併用することで、さらに増強することが分かりました。一方、SNは正常の細胞にも少量産生され、CTLが正常組織を殺傷する可能性があるため、ペプチド免疫を繰り返して副作用が起きないか調べました。すると、長期にわたり免疫を続けても正常の組織に対する攻撃反応は見られないことが分かりました。今後さらに効果や安全性を検討して、ヒトの治療に応用できるよう、研究を続けていきたいと思います。

ペプチド免疫療法は、一昨年ノーベル医学生理学賞を受賞し関心が集まっている免疫チェックポイント阻害剤の治療効果を高めることも期待され、今後ますます研究開発が盛んに進められていく分野であると思っております。

今回、学生の私が日本がん免疫学会総会という大きな会での発表の機会を頂けただけでなく、このような名誉ある賞を頂けましたのは、懇切丁寧に指導してくださった宇高教授をはじめ、高知大学医学部免疫学教室の先生方の支えがあったからこそだと思っております。この場をお借りしまして、改めて心より厚く御礼申し上げます。

表彰状

第114回循環器学会　若手研究者奨励賞受賞について

先端医療学コース　老年病学研究班　医学科4年生　清水 元就　入澤 里桜　城　可方
丹羽 美貴　山中 凪佐

私たちは、第114回循環器学会の若手研究者セクションにおいて、「左室心室瘤における虚血性心疾患と非虚血性心疾患の心電図所見における違い」というテーマで発表し、若手研究者奨励賞を頂くことができました。

左室心室瘤の原因疾患には、陳旧性心筋梗塞（OMI）と非虚血性心疾患（非OMI；肥大型心筋症や心臓サルコイドーシス等）が存在します。最終的には冠動脈造影検査も含めたさまざまな検査によって原因疾患の確定診断が行われますが、これらの原因について非侵襲的な検査である心電図の所見から鑑別する方法についてはほとんど報告されていません。本研究の目的は、心エコー図検査で左室心室瘤を認めた患者において、OMIと非OMIの心電図所見の差異を明らかにすることとしました。

対象は、高知大学医学部附属病院で2008年７月～2018年２月までに心エコー検査で左室心室瘤を認めた患者のうち、原因疾患の診断が確定された患者33名について、後ろ向きに心電図初見の検討を行いました。心室瘤は、収縮期・拡張期を通じ心室壁が瘤状に突出したものと定義しました。原因疾患がOMIとする根拠には、心室瘤の存在部位を説明可能な急性心筋梗塞の治療歴、あるいは冠動脈の有意狭窄が同定されたものとしました。また、肥大型心筋症の診断は、現在あるいは過去に原因不明の15mm以上の壁肥厚が確定されている場合とし、心臓サルコイドーシスの診断は日本循環器学会による「心臓サルコイドーシスの診療ガイドライン」の診断基準をもとに行いました。

検討項目については、年齢、性別、身長、体重、心電図所見（心拍数，リズム，左房負荷あるいは右房負荷、PQ時間、QRS時間、QT時間、QRS電気軸、左室肥大あるいは右室肥大、異常Q波、ST上昇・ST低下、陰性T波）について収集し解析を施行しまいた。また心電図読影に際してはCabrera配列で整理した心電図所見を解析しました。

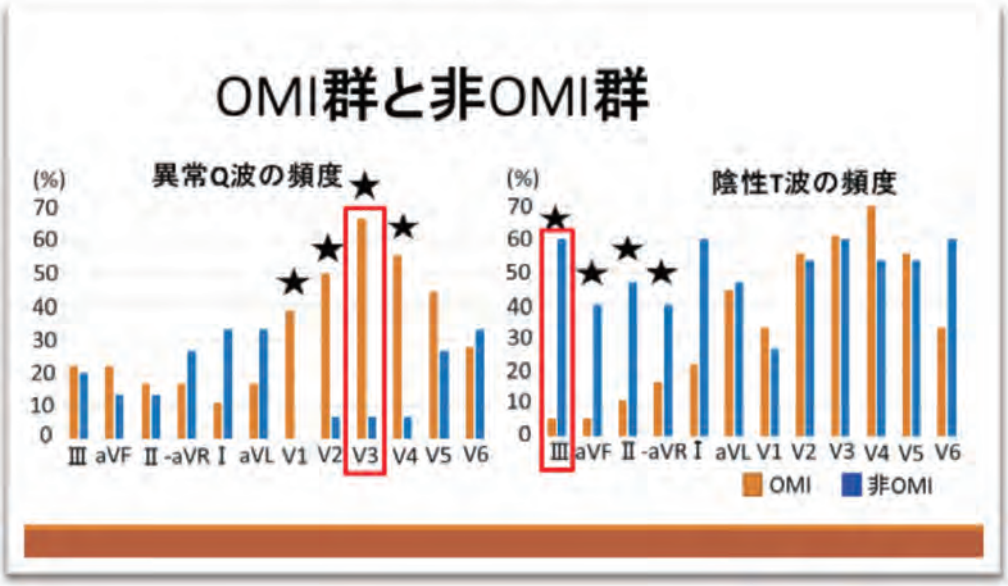
結果についてですが、心拍数・リズム・PQ時間・QRS時間・QRS電気軸・SV１＋RV５・SV１・RV５・左室肥大・QTc時間に関して、２群間で有意な差は認められませんでした。

一方で、OMI患者と非OMI患者の異常Q波と陰性T波の出現誘導の分布については違いが認められました。OMI群についてです。異常Qに関しては、四肢誘導では20%程度に見られ、胸部誘導ではV３誘導をピークにして頻度が高く見られました。陰性T波に関しては、四肢誘導では右肩あがりにaVL誘導にかけて頻度が高くなっており、胸部誘導ではV4誘導をピークに頻度が増加していました。非OMI群についてですが、異常Qに関しては、四肢誘導では下に凸の形で20%前後に認められ、胸部誘導ではV1～V4にかけてはほとんど見られず、V5およびV6誘導で30%程度に見られました。陰性T波に関しては、四肢誘導および胸部誘導，双方とも50%程度に認められましたが、V１誘導では30%程度でした。星印は、OMI患者と非OMI患者の2群間で出現頻度に有意差（p<0.05）のあった誘導を示しています。特に、V3誘導の異常Q波とIII誘導の陰性T波の出現においてそれらの差が顕著でした。

今回の研究において、心電図でV3誘導に異常Q波がありⅢ誘導に陰性T波がなければ心室瘤の

原因疾患がOMIである可能性が高いということが明らかになりました。

末筆にはなりますが、今回このような賞をいただけたのは、指導してくださった久保先生をはじめとする多くの先生方のお力添えがあったからです。高知大学医学部には、２年生の段階からPBLコースと先端医療学コースの選択があります。将来医師になる上でPBLで学ぶような問題解決学習は大きな力になると思います。一方で学生のうちから基礎研究・臨床研究にふれ、さらには発表の機会を与えていただけるのは大変貴重な経験となります。このような環境に身をおかせていただけたことに感謝して、このことを今後の学生生活、さらには医師になってからも活かしていきたいと思います。



＜学生関係行事＞　平成31年４月～令和２年３月

開　催　月　日	行　　事　　名	備考（開催場所等）
４月２日	新入生オリエンテーション	
４月３日	入学式	高知県立県民体育館
４月３日	後援会総会	三翠園
４月４日	医学科６年生とアドバイザー教員との懇談会	
４月５日	白衣授与式	臨床講義棟第３講義室
４月５日	医学科５年生とアドバイザー教員との懇談会	
４月９日	医学科１年生とアドバイザー教員との懇談会	
４月９日	看護学科１年生とアドバイザー教員との懇談会	
４月13日・14日	医学部新入生合宿研修	国立室戸青少年自然の家
４月17日	医学科３年生とアドバイザー教員との懇談会	
４月18日	看護学科３年生とアドバイザー教員との懇談会	
６月11日	第１回関連教育病院運営協議会	
６月23日	第１回医学系大学院説明会	看護学科棟
７月18日	第71回西日本医科学生総合体育大会壮行会	
７月28日	臨床実習後ＯＳＣＥ（医学科６年生）	
８月４日	オープンキャンパス	
８月５日～19日	第71回西日本医科学生総合体育大会（西医体）	関西医科大学主管
８月10日・11日	よさこい祭り「醫(くすし)」	高知市内演舞場他
８月22日	Student Nurse認定授与式	実習棟第２講義室
10月12日・13日	第39回南風祭　　※台風接近の為、縮小開催	
10月27日	第２回医学系大学院説明会	看護学科棟
10月29日	合同慰霊祭	医学部体育館
10月29日	第１回後援会理事会	ザ クラウンパレス新阪急高知
11月２日	ホームカミングデー	朝倉・岡豊キャンパス
11月９日	リーダーシップセミナー	医学部講義棟
11月22日	医学部学生対象防災訓練	
12月15日	臨床実習前ＯＳＣＥ（医学科４年生）	
１月９日・10日	ＣＢＴ試験（医学科４年生）	
１月18日・19日	大学入試センター試験	
２月８日・９日	医師国家試験	高松市
２月13日	助産師国家試験（大学院生）	高松市
２月14日	保健師国家試験	高松市
２月16日	看護師国家試験	高松市
２月25日・26日	前期日程入学試験	
３月16日	医師国家試験合格発表	
３月19日	看護師・保健師・助産師国家試験合格発表	
３月23日	卒業式　　※中止	高知県立県民体育館
３月23日	医学部学位記授与式　　※中止	医学部体育館

学長めし（医学部・学生食堂）

フレンドリーコンサート（病院外来ホール）

フレンドリーコンサート（病院外来ホール）

学生防災訓練

学生防災訓練

白衣授与式・SN授与式

医師・看護師・保健師　国試見送り

医師・看護師・保健師　国試見送り

ハワイ大学医学部プログラムに参加して

医学科3年生　田　中　　香

前々から留学に関心があり、高知大学医学部でハワイ大学からの留学生受け入れのお手伝いに関わったりする中で、このようなプログラムがあることを１年生からなんとなく知っていました。そのため、『３～５年生対象』として掲示を見つけた時、深いことは考えずとにかくすぐに申し込んで、実際に参加させていただきました。貴重な体験ができ、大学や先生方に大変感謝しております。

ハワイ大学医学部での１週間のプログラムは充実しており、日本の医学部ではなかなかできない学びがありました。

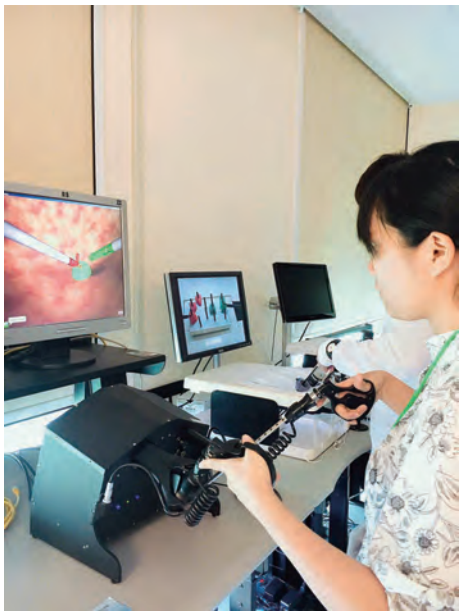
参加者のほとんどが日本人でしたが、大学も学年も異なる医学生と一緒に、専門的な医学の題材で、もちろん英語で、PBLや医療面接の練習をしたことは、3年生の私にとって刺激的でした。題材がまだ習っていない呼吸器や循環器だったので日本語でも知らない知識が多かったのですが、同じグループの４年生がしっかり理解してPBLに参加している様子を見て、驚きました。来年もしこのプログラムに参加するとしたら彼らのように話せるようなレベルになっていたいなと、勉強に対するモチベーションが上がりました。PBLにはハワイ大学の学生も参加していて、彼らもまた２年生ながら自分より知識が豊富でした。

また、医療面接について、高知大学の英語の授業中、生徒同士でやった以外には、やったことがなく、実際の患者さんに禁煙を勧めたり聴診を行ったりする練習は初めてでした。日本語ですらやったことのないことを英語でやるので、とても緊張したことを覚えています。けれども、事前にハワイ大学の先生方が分かりやすくかつ楽しく教えてくださったため、習ったことを実践することで身になりましたし、患者さんへの声掛けの仕方などは、今後も間違いなく役に立つ経験です。

一番楽しかったのは、注射の練習です。参加者２人１組になり、お互いに練習し合いました。６年間医学部にいても、注射器を使うことは数回しかないと聞きます。ましてや３年生では全く触ってもいません。小さめの針とはいえ、初心者には長く見えてしまい怖かったです。しかし、教えられた注射のさし方はシンプルで、想像していたより全然痛くありませんでした。

他には、内視鏡や外科的手術のシミュレーションもありました。何から何まで、「初めて」ばかりでした。３年生という若い学年であっても、たくさんの学びが得られました。

ここまでプログラムの勉強的な側面を書いてきましたが、ハワイ大学の学生や他大学の参加者との交流や、ハワイという場所も、魅力的でした。いろんな人と学校の話などを共有でき面白かったですし、毎日のハワイ大学でのプログラム後、食事や観光に行ったりもしました。大学が海やショ



ッピングセンターに近いので、勉強した後はビーチで遊んで過ごすこともできる素敵な環境です。さらには、ハワイでは基本的に天気の良い日が多く、流れる時間がゆっくりしているのです。このような恵まれた環境のおかげで、ハワイ大学留学がただ勉強のためだけにとどまらず、勉強も遊びも含め、ハワイで過ごしたことすべてが、自分にとって楽しいものだったと断言できます。

最後に、少しでも海外や留学に関心のある方に、伝えたいことがあります。それは、この留学は一般的な留学と比べて、内容的にも金額的にも参加しやすいものであることです。私は英語にそこまでの自信はありませんでしたが、他の参加者も皆が英語をペラペラに話せるということはなかったので、英語に関してあまり心配はいりませんでした。また、内容について３年生にはやや難しいものもあるように感じましたが、周りが上級生ばかりで確実に刺激を受けますし、上の学年で参加されれば、より勉強したことと結びついて有意義な時間になると思います。１週間という短期間ですし、これに参加したからと言って英語が上達するものではありませんが、これからの医学の勉強につながる機会として文句のないプログラムであるということです。

改めまして、この留学に参加できましたこと、小林先生をはじめとする大学の方々に感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

台湾大学留学プログラムに参加して

高知大学医学部看護学科4年生　堀　坂　侑　加

初めて訪れた台湾での短期留学は、１週間と短くも日本との違いにあふれた刺激的なものとなりました。共通語が英語でしたが、英語と触れる機会が普段あまりないため、不安を抱えながらのスタートでしたが、台湾大学の留学生や先生方に助けていただきながら、大変充実した貴重な時間を過ごすことができました。

台湾大学病院で精神科や内科などの病棟に入って現場を見せていただき、実習中の台湾大学の看護学生と病棟看護師さんに付いて回らせていただきました。私たちの実習先の病院と異なる点がいくつかあり、驚くこともありました。全体を通して私が最も印象的だったことは、院内に病院ボランティアがいらっしゃり、医療スタッフと連携して活動されていたことでした。私が話した50代の男性は、以前に病院で療養されていて、社会貢献のためにこの活動を始めたとおっしゃっていました。彼らは、患者さんのベッドサイドにお茶を持って行って話をする人、入浴介助をする人、お別れ会や誕生日会を開くための準備や事務などを行う人など、いくつかのチームに分かれて活動していました。医療スタッフと患者やその家族、ボランティアの方々など、院内には多くの人がいて活気があり、とても新鮮に感じられました。

5日目には山や海に囲まれた土地にある金山病院に行き、地域で活躍する訪問看護師さんに同行して2軒のご自宅に伺うことができました。私が在宅実習のときに同行した看護師は、ご自身で車を運転し患者さん宅へ訪問していましたが、台湾では病院の車を運転するドライバーもチームの一員として働いていらっしゃいました。また、慣れ親しんだ自宅で最期を迎えるというのがしきたりで、患者さんが亡くなった後、自宅でテントを出して行うパーティーでは、看護師とドライバーが家族と一緒に飾りつけなどをするそうです。伺った先の患者さんやご家族は、訪問看護師やドライバーをまるで家族のように受け入れている様子で、自宅のソファーで手作りのお菓子を食べて和

気あいあいとお話されているのを見て驚くとともに、患者・家族とスタッフの間に大きな絆を感じました。

1週間という短い期間でしたが、病院や大学内、観光スポットなど様々な場所に台湾大学の学生の皆さんが案内してくださいました。台湾では中国語が公用語ですが、皆さん日常会話だけでなく医療英語も知っており、英語を使うことに慣れていました。そのため、英語力の差でコミュニケーションがスムーズにとれないことにもどかしさを感じましたが、世界の人とつながるために英語を話せるようになりたいという気持ちが一層強くなりました。また、同じ看護師として働くために勉強している台湾の学生と出会い、国は違うけれども同じ世界の中で自分も何かに挑戦し、成し遂げたいと思うようになりました。

最後になりましたが、今回短期留学に参加するうえでお世話になった皆様方に心より感謝申し上げます。

第66回よさこい祭り

醫-KUSUSHI-代表　医学科3年生　濵　田　大　我

こんにちは。高知大学医学部よさこいチーム醫-KUSUSHI-です。

よさこい祭りは、毎年８月９～12日の４日間開催される、高知の代表的なお祭りの１つで、高知県が発祥だと言われています。このよさこい祭りは、1954年に21団体750人でスタートし、2019年で66回目を迎えました。現在では全国各地からチームが集まるようになり、約200団体、約18,000人が参加し、高知の夏をさらに熱く盛り上げています。

我々「醫-KUSUSHI-」も、高知大学医学部の前身である高知医科大学の時代からよさこい祭りに参加しており、今回で通算39回目の参加となる、伝統あるチームの１つです。

「醫」という字は普段見慣れない字だと思いますが、これは「医」の旧字体であり、チーム醫は、医学の道を志す学生が中心となって作られているチームなのです。

チーム醫は、衣装のデザイン、作曲、振り付け、地方車(音響や照明を乗せて踊り子を先導するトラック)の装飾を全て学生で行っています。まず最初に行うのはテーマ決めです。そして、そのテーマに合うような衣装、曲を作り、さらにその曲に合わせて振り付けを考えていきます。そうやって初めてスタートラインに立てます。そこから、振りを教え、練習し、地方車のデザイン・装飾もして．．．とチーム全員で、本当に全員で協力して、本番まで半年以上の時間をかけて準備していきます。

さて、少し前置きが長くなりましたが、話を今回のよさこい祭りの話に移しましょう。

毎年醫が立てているテーマですが、今回は「疾風迅雷」でした。そのテーマに合わせて今回作曲してくださったのは、医学科の５年生の方で、その方は現役の学生でありながら、バンドを組んで実際に音楽活動もされています。ロック調でありながらも和の要素が入っており、まさに疾風迅雷の如く疾走感のある、カッコいい曲を提供してくださいました。カッコよかったのは曲だけではありません。振り付けもカッコよく、エキサイティングなものでした。振り付けは、ダンス部の２年生が考えてくれましたが、彼女もダンス歴が長く、ダンス部の中でも一目置かれる存在です。そんな彼女が作ってくれたのは、ダンス部らしさがたくさん詰まった振り付けで、いい意味でよさこいらしくなく、曲をさらに際立たせるような振りでした。お二人のおかげで、踊り子全員が本当に楽しそうに踊っており、中にはよさこいが終わっても「まだ踊りたい」と泣いてしまう子供がいたほどでした。よさこい本番はトラブルもありました。これは完全に代表の私のミスでしたが、本来踊れたはずの、しかも一番楽しい帯屋町商店街で踊れなかったのです。他にも、地方車の照明が切れたり、音響の調子がおかしくなったりと、様々なトラブルが起こりました。それでもみなさんがいろいろカバーしてくださって、おかげで最後までいろいろな会場で踊ることができました。ほんとにいいチームだな、と今この原稿を書きながらもしみじみ感じています。

こうしてみんなが楽しく踊れたのも、参加者に振りを教えてくれた学生、衣装や地方車のデザインをしてくれた学生など、多くの学生の協力が背景にはあり、醫は毎年毎年チーム全員で、このチームを作り上げています。私は、こうして醫の活動を通して得た経験は、他でそう簡単に得られるものではないと思っています。そういうものを、

将来医療者として働いていくうえで役に立てれば、この醫としての活動もより意味のあるものにできるのではないかと考えております。

醫は学生が中心となって運営している、という話でしたが、当然学生だけの力では成り立ちません。毎年毎年多くの企業様、病院およびその関係者様、学校関係者の方々、OBOGさんからのご支援を頂いております。そういった協賛してくださる方々がいらっしゃるからこそ、この醫はここまで続いてきています。改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

今年もこのように醫の活動を報告できたこと、本当に嬉しく思います。醫-KUSUSHI-の歴史はまだまだ続いていくと思います。これからもよさこいチーム醫-KUSUSHI-の活動を見守っていて下されれば幸いです。

第39回南風祭を終えて

南風祭委員長　医学科2年生　田　村　諒　太

第39回南風祭の実行委員長を務めさせていただきました、田村諒太です。年に一度、また、最も医大が熱くなる一大イベントである南風祭。その実行委員長を引き受けさせていただいたときは、楽しみな気持ちでいっぱいでした。しかし、前年度の委員長から仕事内容や心構えを伺い、委員長としての責任感が芽生えると同時に、学祭運営に対する不安も感じるようになりました。

初めての実行委員としての仕事は、1，2年生の部署決めとテーマ決めでした。部署決めは、たくさんの部署チーフの希望を聞きながら、1年生と2年生を適切に割り振るという仕事です。この仕事は実行委員や、部署チーフと話し合いながら、納得のいくように決めることができました。しかし、問題はテーマ決めでした。テーマは学祭の顔となる、学祭全体を表すものです。すぐに決められると思っていたものの、なかなか納得のいくものにすることができませんでした。そして、話し合いの結果、「新時代の幕開けだ！目覚めよ医大生！」というテーマに決まりました。令和の年を迎えての初の南風祭であること、またそれとともに、今一度南風祭を盛り上げたいという思いから、このようなテーマに決めることができました。

テーマが決まってからは各部署の仕事や、実行委員の仕事も本格的なものとなってきました。特に広告取りがメインの仕事になりました。自分は、南国自動車学校さんに広告のお願いをしに行きました。南国自動車学校さんは、快く広告を引き受けてくださり、感謝の気持ちとともに、南風祭が歴史あるものだということ、たくさんの人の協力でできていることを感じました。また、たくさんの人と話を重ねる中で、人とのつながりの大切さを実感しました。また、広告取りだけではなく、実行委員で花火の募金活動を行いました。そこでは、たくさんの先生や学生が募金に協力してくれました。先輩方や後輩、同級生、教授の方々、また地域の皆さまの協力があって、初めて学祭を開催できるということを強く感じました。また、教授の方々や、先輩方の励ましの言葉は本当に嬉しく、今でも忘れません。

そして、いよいよ学祭まで一週間を切ったとき、あるニュースが飛び込んできました。台風19号の接近です。観測史上最大級の大型台風の進路は、高知県を縦断していくものでした。そこで、まず、ステージ設営の有無を確認したところ、野外ステージは安全上建てられないということです。大型な台風であったこと、また、その進路から、野外ステージ設営の中止、また縮小開催を決定しました。そのため、学祭全体のスケジュールを大幅に変更することとなりました。スケジュールにはたくさんの人の動きが絡んでいるので、簡単に動かすことができません。そのため、電気の配線をお願いしている岡さんや、食堂ライブなどの音響を担当していただいているキャラバンサライさんと、メールや電話で何度も話し合いを重ねました。

この仕事が、最も大変な仕事となりました。実行委員と一部の部署チーフで毎日話し合いを重ね、業者の方々とも何十回も電話でのやりとりを行いました。10を優に超える企画、また、たくさんの部活のイベントとのタイムスケジュールの兼ね合いは、なかなかうまくいきませんでした。すべての人たちの希望をかなえることのできない中でも、先輩方や業者の方々の励ましの言葉やアドバイスのおかげで、タイムスケジュールを組むことができました。また、これは実行委員だけでなく、たくさんの同期との協同があったからこそ、作成することができたと思います。

いよいよ、南風祭当日は縮小開催となりましたが、なんとか開催に至ることができました。1日目は大きなトラブルなく進行することができましたが、問題は2日目でした。台風の余波に見舞われ、2日目の午前中に出店のテントを立てることができなかったのです。風は落ち着く気配がなく、実行委員と業者の方と緊急で話し合うことになりました。その際、各部活の皆さんはテント移動を迅速に行ってくれるだけでなく、実行委員の無理な頼みも快く引き受けてくださいました。また、業者の方々もいろいろな案を提案してくださり、なんとか午後からは出店も開催することができました。縮小開催ではありましたが、例年と変わらないどころか、それ以上の盛り上がりを感じました。最後には、無事花火も打ち上げることができ、なんとか締めくくりを迎えることができました。

この南風祭を振り返ってみると、自分はたくさんの人に支えられていたのだということを強く感じました。翌日の片づけを終えたとき、やり遂げることができたという気持ちで胸がいっぱいになりました。実行委員は日の当たらない役回りではありますが、この経験を通して、たくさんの人たちの協力で学祭を行うことができるのだと体感しました。学祭は、先輩、後輩、同期のみんな、教授の先生方、地域の皆さま、業者の方々、協賛してくださった企業の皆さまなど、数えきれないほどの人たちに支えられています。四国電飾工芸さん、キャラバンサライさん、カイト興業さん、高村火薬店さん、学校関係者の皆さまには様々な助言をいただくだけでなく、たくさんのわがままを聞いていただきました。皆さんのおかげでこのように無事に学祭を終えることができました。この場を借りて、今一度お礼申し上げます。

また、自分自身も、この学祭を通じて一つ成長できたと思います。しんどいこともありましたが、このような経験をさせていただいたことに今は深く感謝しています。自分の最後の仕事は、後輩に南風祭をよりよく、楽しいものにできるように伝えていくことです。南風祭は、これからも続いていかなければならない高知大学医学部の文化です。どうぞ、これからも南風祭をよろしくお願いします。

＜課外活動紹介＞

新生、医学部ハンドボール部

医学科4年生　小　柴　佑　太
（ハンドボール部部長）

こんにちは！僕たち、医学部ハンドボール部は、平成30年６月１日付けにて承認していただいた新設の部活です。まだまだ若いチームですが、この令和元年度の１年は大きな変化があり、今回「おこうだより」に執筆させていただきます。

みなさん、ハンドボールというスポーツをご存知ですか？ボールを相手のゴールに入れて点を競う球技で、簡単に言うとサッカーのゴール、バスケットボールのドリブル、バレーボールの機動力を組み合わせたような球技です。ハンドボールの大きな特徴は、相手とぶつかるコンタクトプレーが認められていることです。さらに、ジャンプして空中でシュートを打つことから、ハンドボールは「空中の格闘技」とも呼ばれ、「走る・跳ぶ・投げる」の３要素を含むダイナミックなスポーツです。

話は戻りますが、この１年には予想もできないほど大きな出来事がありましたので、順にお話しします。

まずはコーチとの出会いです。６月に開催された高知県ハンドボール夏季大会に参加した時のこと。僕たちが高知県の大会に参加したのはその時が初めてだったのですが、そこで大原さんという方が声をかけてくださいました。もちろん声をかけてくださったのは嬉しかったのですが、最初はこの人誰だろうと思ったのが正直なところです。そうして次の練習をみていただき、それから指導していただけることになりました。そのコーチは大学時代、強豪校でプレーしていた方で、ハンドボールに対して真剣で、とても精通しています。指導はいわゆる体育会系という感じでしょうか、理論派というより実践派という感じです。初めは練習についていくのも大変でしたが、日に日に上達するのが実感でき、ハンドボールという球技がますます好きになっていきました。また、練習のみならず、ハンドボール用ゴールの手配もしていただき、練習環境が格段に良くなりました。以前はフットサル用ゴールを使用していましたが、ハンドボール用ゴールとは違いがあり、本物のゴールを使用しての練習はモチベーションも上がります。

どうして僕たち高知大学医学部ハンドボール部に興味を持ってくださったか聞いてみたところ、それはそれは意外なきっかけでした。私は医学部ハンドボール部を創部する前、他の部活に所属していました。そこでお世話になったコーチのお知り合いだったのです。そのコーチが、私がハンドボール部を創部しようとしていることを伝えてくださり、それで大原さんは僕たちを知ることになったそうです。

こうして大原さんと練習に励む中、テレビ取材を受けてみないかというお話をいただき、お受けすることにしました。実際にカメラが回りマイクを向けられると緊張してしまい、あまり上手く話すことはできませんでしたが、とても貴重な経験をすることができました。また、「新設部活の西医体への初挑戦」という内容で番組を制作していただき、チーム全体の大会への士気が上がったのを覚えています。

そうして迎えた８月、西医体です。参加校は、24チーム。初めての西医体でしたので、初めてみるチームも多く、規模の大きさに圧倒されました。ハンドボール競技部門は、まず24チームを３チーム毎の８グループに分け、予選を行います。その予選グループ内で上位２チームが決勝ト

ーナメントに進出できます。予選の相手は、富山大学と愛知医科大学、どちらも格上の相手です。結果は、１勝１敗で予選２位通過でした。とても嬉しかったです。目標ではありますが、初参加で達成できるほど簡単ではないと思っていましたので、本当に嬉しかったです。決勝トーナメントでは１回戦で敗退してしまい、全体としてはベスト16という結果で、初めての西医体を終えました。目標は達成したものの、決勝トーナメントでの敗退は悔しく、さらに勝ち上がっていきたいという野望を抱きました。来年度の西医体では、決勝トーナメントでの１勝、つまりベスト８を目標に精進して参ります。

最後に、医学部ハンドボール部の創設から今日まで、顧問の関先生をはじめ学生課の方々には大変お世話になりました。そして大原さんというコーチや練習に来てくださる社会人の方々との出会い。多くの方々に支えられて、僕たちは活動することができています。この場をお借りいたしまして、御礼申し上げます。医学部ハンドボール部の活動を通して、人との繋がりの大切さを改めて強く感じています。感謝の気持ちを忘れずに、さらに飛躍していきたいと思っております。これからも温かいご支援をよろしくお願いいたします。

高知大学医学部　ダンス部

医学部医学科3年生　三分一所　佑　輔
（ダンス部部長）

高知大学医学部ダンス部は、岡豊キャンパスの修志館で活動している部活です。今回は、我々ダンス部が普段どのような活動を行っているのかを紹介させていただきたいと思います。

ダンスと一括りに言っても、その中に様々なジャンルに分かれていることを知っているでしょうか。私たち高知大学医学部ダンス部では、Hip hop、Lock、Waack、Pop、Jazz、House、Soul、Girl`s hip hop、Breakの計９ジャンルがあり、月曜日から金曜日に各ジャンル週一回のペースで練習をしています。高知大学医学部ダンス部が作られた時からこの９ジャンルがあるわけではなく、このジャンルをやりたいと思う人が集まることで、各ジャンルが成り立っています。その中でも、Waack、Soul、は昨年度から新しく作られたもので、ダンス部員が自ら立ち上げて出来ました。いくつかのジャンルを重複して行っているダンス部員が多く、一年生から六年生までいれると計70名ほどで、医学部の部活動の中ではかなり大きな団体となっています。

次に普段の部活時間でどのようなことをしているのか紹介します。練習内容としては、各ジャンルによって異なりますが、柔軟体操から始まり、アイソレーション（ダンスの全ジャンルに共通する基礎トレーニングの一つで、首、肩、胸、腰などの一部分を独立させて動かすもの）、そして各ジャンルに特徴的な技、動きの練習をしています。これらの練習は各ジャンルに存在するリーダーを主体に、上級生から下級生に指導を行っています。また、年に数回開催されるダンスイベントの前にはそのショーケースの練習が主になります。

ダンス部のイベントというのは、新入生歓迎の際に行われる新歓イベント、新しくダンス部に入った一年生の初めてのお披露目の場であるNew Comer Event、南風祭のダンス部ステージ、そしてダンス部医学科六年生、看護科四年生の最後のイベントの卒業イベントが大きなイベントとしてあります。どのイベントのショーケースもダンス部員だけで、曲編、構成、振り付けを行っています。ほとんどのイベントは高知大学敷地内の学館を借りて会場を作り開催しています。これらのイベントは高知大学医学部生だけでなく一般の方にも来ていただきたいと思うのでぜひお越しください。

日頃の練習や、イベントのショーケース作りは全て学生で行っていますが、ダンス部員のほとんどがダンス未経験者で、大学で初めてダンスに触れる人ばかりです。実際自分自身もダンス未経験でありましたが、一年生の四月どの部活に入ろうか迷っていた時、新歓イベントで踊っている先輩方の姿を見て、自分もこうなりたい、ダンス部に入りたいと思い入部しました。日々の練習で先輩たちから指導をうけ、三年生である今では後輩に教える立場でもあります。高知大学医学部ダンス部はこのようにして、代々ダンスの技術が伝わっているのだと実感しています。

またダンス部は高知大学医学部外の活動も積極的に行っています。まず初めに高知大学医学部付属病院において開催される、フレンドリーコンサートです。このイベントは、高知大学医学部附属病院の入院患者さんの慰安を目的としたもので、高知大学医学部の軽音部、合唱部、管弦楽団などが参加しており、毎年ダンス部も参加させていただきショーケースを披露しています。毎年たくさんの患者さんが見に来てくださり楽しんでもらえているのでとても嬉しく思っています。次に、高知大学朝倉キャンパスのダンスサークルとの交流です。私たち医学部ダンス部と朝倉キャンパスのダンスサークルは交流が盛んで、お互いのイベントに招待しあい、出演しています。また、毎年夏には合同のダンス合宿があり、ダンスの技術の向

上を目指すとともに、お互いの親睦を深める目的で開催されています。他のダンス部の踊りを見ることはすごく刺激的であり日々の練習の取りくみの原動力になっています。

ダンス部の取り組みとしては、自分たちのダンススキル向上だけでなく、ショーケースを見に来てくれた方たちに喜んでもらえるように頑張っています。そして最後に、顧問の由利先生、OB.OGの方々、いつもイベントで使う照明の機材を貸してくださっている四国電飾工芸さん、ダンス部を支えてくださっているすべての方たちにこの場を借りて感謝申し上げます。これかも温かいご支援のほどよろしくお願いいたします。

◆令和元年度 医学部後援会 被表彰団体・個人一覧

《団体》第71回西日本医科学生総合体育大会　■総合成績：16位

団　体　名	順位	成　　績
医学部バスケットボール部	3位	女子団体

《個人》第71回西日本医科学生総合体育大会

氏　　名	学科学年	順位	団体名	成　　績
井　上　愛　美	医学科3年	優勝	医学部剣道部	女子個人戦
野　間　美　羽	医学科2年	優勝	医学部水泳部	女子200m自由形
〃	〃	優勝	〃	女子400m自由形
塩　見　真　章	医学科5年	準優勝	医学部水泳部	男子400m個人メドレー
丑　本　知　大	医学科1年	準優勝	医学部水泳部	男子50m自由形
〃	〃	準優勝	〃	男子100m自由形
中　越　みずほ	医学科4年	準優勝	医学部弓道部	女子優秀射技賞
岡　田　あずさ	医学科6年	3位	医学部陸上競技部	女子5000m

《団体》コメディカル体育大会　第22回西日本医療系学生合氣道大会

団　体　名	順位	成　　績
医学部合氣道部	第3位相当	敢闘賞

《個人》コメディカル体育大会　第22回西日本医療系学生合氣道大会

氏　　名	学科学年	順位	団体名	成　　績
上　坊　昌　也	医学科4年	第3位相当	医学部合氣道部	敢闘賞
片　岡　　希	看護学科3年	第3位相当	医学部合氣道部	敢闘賞

《個人》コメディカル体育大会　第3回西日本コメディカル空手道大会

氏　　名	学科学年	順位	団体名	成　　績
西　浦　美　波	看護学科2年	第3位	医学部空手道部	

《白衣授与式》

平成31年度「白衣授与式」を行いました

学務委員長　渡　橋　和　政

４月５日（金）、スチューデント・ドクターとなった新５年生124名に同窓会組織から白衣を贈る「白衣授与式」を行いました。前回に引き続き、多くの保護者の皆さんのご出席をいただき、同日テレビでも放映されました。昨年はアドバイザー教員から一人ずつ着せてもらい時間がかかったため、今年は菅沼医学部長から「おめでとう」の言葉とともに直接手渡しされた白衣をその場で着るという形で行いました。学生代表の田中漱一郎君から、お礼の言葉とともに力強い意志が聞かれ、厳粛に式が終了しました。事後アンケートでも、みなさんから「よかった」と言う声を数多くいただき、５年生からは「医師になるんだという実感が湧いた」「より一層がんばらなければ」という声が多く、現在その言葉を胸に臨床実習に励んでいます。同席の１年生からは、「自分も早くこうなりたい」という気持ちが聞こえてきました。一部の保護者の方々に席が足りなかったことをお詫び申し上げ、次回は改善しみなさまをお迎えしたいと思います。

平成31年度「白衣授与式」

看護学科のスチューデントナース授与式（2019年）について

看護学科長　栗　原　幸　男

看護系学校では、看護学生が初めて病院実習に臨むにあたって、患者さんに接する態度や実習に取り組む姿勢を改めて意識してもらうための戴帽式の伝統があります。近年、戴帽式を行わない４年制看護系大学等が増えおり、本学看護学科も戴帽式をしていませんでした。しかし、やはり臨地実習への意識付けが必要と考え、半年間の本格的な臨地実習に先だって３年生の夏にスチューデントナース授与式を２年前から始めました。

それ以前は、３年生の臨地実習の履修許可判定のために、３年の１学期までに開講されたすべての専門科目の単位修得を確認しているだけでした。その許可された学生にスチューデントナースの称号を授与する。これにより、看護学生に、患者さんや施設利用者に責任を持って対応しなければならないスチューデントナースへと変身するターニングポイントを明確に意識付けられます。また学生アンケート結果でも学生のモチベーションを大いに高められることが示されています。

初回（2017年）の授与式は大変簡素なものでしたが、２回目からは授与対象の３年生に加えて２年生にも参列してもらい、先輩を祝福すると共に、これから始まる自分たちの病棟実習に臨む心構えを再確認する機会としました。

授与式では、看護学科長のあいさつの後に３年生一人一人に看護学科長からスチューデントナース認定証と、スチューデントナースの誓いが入った顔写真入りの名札が手渡され、３年生全員でスチューデントナースの誓いを宣言しました。臨地実習に臨むにあたり、医学部長・訓辞、附属病院看護部長・講話があり、式典は厳粛に終了しました。

式の感想を聞く学生アンケートでは、「非常に良かった」または「良かった」と２年生、３年生の75％が回答しています。今後、さらに式典の充実を図り満足度を上げたいと思いますので、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

令和元年度「認定証授与式」

《医学部准教授講師会の活動》

「KMSリサーチミーティング」と「准講会講師派遣事業」

医学部准教授講師会副会長　杉　本　加　代
（地域看護学講座）

高知大学医学部准教授講師会（准講会）は、医学部内の准教授と講師を会員とし、会員からの出資によって研究や教育そして地域貢献などの活動をしています。

「KMSリサーチミーティング」は准講会の主要な活動であり、高知県内の大学・研究機関で行われている医学・医療にかかわる研究の発表と意見交換を行い、新たなアイデアや連携の創出を目的として毎年実施しています。今年度は令和２年２月５日（水）・６日（木）に開催し、56演題のポスター発表と熱心な意見交換が行われていました。審査の結果、学部学生の演題３題を含む14題が賞を受賞しました。２日目に行われた授賞式では、受賞した学生達が櫻井克年高知大学学長と緊張しつつも誇らしそうに懇談していました。

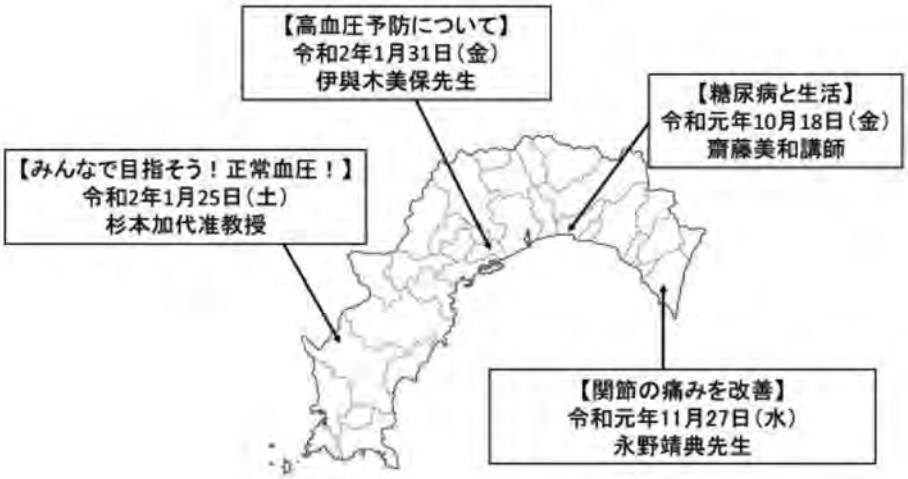
本ミーティングの開催にあたり、学長を初めとする学内関係者、医学部教授会、豊仁会、高知信用金庫安心友の会、高知県医師会、医学部同窓会、看護学同窓会から多くのご支援を賜りましたことに感謝申し上げます。また、会場設営にご協力いただいたダンス部学生に御礼申し上げます。

第19回KMSリサーチミーティングの様子

第19回 KMSリサーチミーティング受賞者一覧

受賞名	受　賞　者	所　　属	発　　表　　演　　題
最優秀賞	森　坂　広　行	膚科学教室	CRISPR-Cas3による哺乳動物細胞でのゲノム編集
優秀賞（４名）	Ｓｙｌｖｉａ　Ｌａｉ	総合研究センター	肝がん細胞の増殖に関与する新たなRBP/miRNAパスウェイの解明
	中　村　里　菜	薬理学	フラグメントペプチドを用いた Tob / BTG ファミリータンパク質 Box A ドメインの機能解析
	山　本　真有子	皮膚科学教室	Mowat-Wilson症候群患者の毛髪メラニン分析
	横　田　啓一郎	第一外科	glypican-1を標的とした抗体薬物複合体（ADC：Antibody-drug conjugate）による難治性癌の新規治療開発
奨励賞（５名）	道　家　章　斗	検査部	microRNAを指標としたエタノール摂取時期推定に向けた基礎的検討
	ＺＯＵ　ＳＵＯ	薬理学	Age-dependent changes in responses to hydrogen sulfide in the bladder of spontaneously hypertensive rats
	古　賀　有里子	統合生理学	匂いによる誘引行動学習に関わる嗅結節の活性化メカニズムの検討
	Fabricio M. Locatelli	麻酔科	Preventive effect of resveratrol-loaded nanoemulsion against cognitive decline after abdominal surgery in aged rats
	小　森　　香	環境医学	Verbal abuse during pregnancy increases frequency of newborn hearing screening referral: The Japan Environment and Children's Study
安心友の会特別賞	南　口　博　紀	放射線科	胃静脈瘤に対するBRTO時に新規塞栓硬化物質としてのNLEの有用性について-ブタ静脈を使用した動物実験の検討-
医学部同窓会賞	芝　原　与　喜	放射線科・学部学生(４年)	Ai-CTによる脾臓の生前死後体積の定量化比較検討-死後有意に縮小する特殊な死因について
	西　森　友　俊	先端医療学推進センター・学部学生(４年)	ヒト臍帯血細胞投与によるマウス脳傷害局所におけるケモカインレセプター発現の亢進効果
看護学同窓会賞	濵 田 倫 行　他	看護学科・学部学生(４年)	「病棟看護師における薬剤への認識」～アンケート調査の結果から～

「准講会講師派遣事業」は、地域貢献を目的に平成30年度から開始した事業であり、高知県内の自治体主催の医療や保健に関する講演会等に准講会会員を派遣するものです。テーマによっては、高い専門的知識を有している医学部附属病院スタッフにご協力いただきながら事業を行っています。自治体からは、「分かりやすい講義で勉強になった」「今度は健康まつりに来て欲しい」などのご意見がありました。



令和元年度の講師派遣先

《資料》

◆平成31年度入学試験

平成31年度の医学部入学試験について、医学科は、ＡＯ入試Ⅰが平成30年９月１日(土)に１次、平成30年10月９日(火)～19日(金)に２次の試験が実施され、推薦入試Ⅱが平成30年12月12日(水)～14日(金)に、前期日程試験が平成31年２月25日(月)・26日(火)に実施された。看護学科は、推薦入試Ⅰが平成30年11月17日(土)に、前期日程試験が平成31年２月25日(月)に、後期日程試験が平成31年３月12日(火)に実施された。

志願者・受験者・入学者数

年度	学部 学科	志願者 数	受験者 数	入学者 数	入学者の内訳					
					県内	県外	男	女	卒見込者	既卒者等
31	医学部 医学科	人 521 男 315 女 206	人 488 男 293 女 195	人 110 男 75 女 35	人 32 男 23 女 9	人 78 男 52 女 26	人 75	人 35	人 35	人 75
	医学部 看護学科	人 281 男 16 女 265	人 209 男 13 女 196	人 61 男 5 女 56	人 17 男 0 女 17	人 44 男 5 女 39	人 5	人 56	人 56	人 5

年度	学部 学科	志願者 数	受験者 数	入学者 数	入学者の内訳					
					県内	県外	男	女	卒見込者	既卒者等
30	医学部 医学科	人 613 男 347 女 266	人 496 男 275 女 221	人 110 男 58 女 52	人 32 男 16 女 16	人 78 男 42 女 36	人 58	人 52	人 35	人 75
	医学部 看護学科	人 245 男 25 女 220	人 180 男 19 女 161	人 60 男 7 女 53	人 23 男 5 女 18	人 37 男 2 女 35	人 7	人 53	人 56	人 4

年度	学部 学科	志願者 数	受験者 数	入学者 数	入学者の内訳					
					県内	県外	男	女	卒見込者	既卒者等
29	医学部 医学科	人 562 男 329 女 233	人 530 男 311 女 219	人 110 男 69 女 41	人 34 男 17 女 17	人 76 男 52 女 24	人 69	人 41	人 35	人 75
	医学部 看護学科	人 203 男 14 女 189	人 150 男 14 女 136	人 60 男 3 女 57	人 26 男 2 女 24	人 34 男 1 女 33	人 3	人 57	人 56	人 4

◆令和元年度学生数

学部学生　　令和元年5月1日現在

学科	医学科							看護学科					合計
年次	1	2	3	4	5	6	計	1	2	3	4	計	
男	76	65	86	87	93	80	487	6	7	2	12	27	514
女	35	56	43	32	31	29	226	59	51	67	59	236	462
計	111	121	129	119	124	109	713	65	58	69	71	263	976

大学院学生　　令和元年5月1日現在

課程 専攻	博士課程					修士課程						合計
						医科学専攻			看護学専攻			
年次	1	2	3	4	計	1	2	計	1	2	計	
男	14	15	15	45	89	10	9	19	1	0	1	109
女	11	6	5	22	44	2	7	9	13	24	37	90
計	25	21	20	67	133	12	16	28	14	24	38	199

※外国人留学生数を含む

◆医師国家試験合格状況

回数及び実施年	卒業生	受験者			合格者			合格率			総合順位	国立大学順位
		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計		
		名	名	名	名	名	名	%	%	%		
第77回 昭和59年	第1期生 97名	97	−	97	97	−	97	100.0	−	100.0	1 /76	1 /39
第79回 昭和60年	第2期生 85名	85	−	85	82	−	82	96.5	−	96.5	8 /76	5 /39
第80回 昭和61年	第3期生 105名	105	3	108	99	2	101	94.3	66.7	93.5	18/79	14/42
第81回 昭和62年	第4期生 89名	89	7	96	83	5	88	93.3	71.4	91.7	28/80	22/43
第82回 昭和63年	第5期生 107名	106	8	114	103	5	108	97.2	62.5	94.7	6 /80	4 /43
第83回 平成 1 年	第6期生 101名	101	7	108	94	7	101	93.1	100.0	93.5	15/80	9 /43
第84回 平成 2 年	第7期生 91名	91	7	98	87	7	94	95.6	100.0	95.9	4 /80	2 /43
第85回 平成 3 年	第8期生 99名	99	4	103	86	2	88	86.9	50.0	85.4	49/80	35/43
第86回 平成 4 年	第9期生 101名	101	15	116	94	10	104	93.1	66.7	89.7	19/80	12/43
第87回 平成 5 年	第10期生 101名	100	11	111	92	9	101	92.0	81.8	91.0	44/80	29/43
第88回 平成 6 年	第11期生 95名	94	11	105	92	6	98	97.9	54.5	93.3	11/80	8 /43
第89回 平成 7 年	第12期生 101名	101	8	109	97	4	101	96.0	50.0	92.7	17/80	9 /43
第90回 平成 8 年	第13期生 82名	82	9	91	80	7	87	97.6	77.8	95.6	17/80	8 /43
第91回 平成 9 年	第14期生 95名	94	4	98	88	0	88	93.6	0.0	89.8	39/80	22/43
第92回 平成10年	第15期生 101名	101	10	111	91	5	96	90.1	50.0	86.5	66/80	39/43
第93回 平成11年	第16期生 97名	97	16	113	85	10	95	87.6	62.5	84.1	52/80	36/43
第94回 平成12年	第17期生 86名	86	18	104	79	7	86	91.9	38.9	82.7	34/80	23/43
第95回 平成13年	第18期生 92名	92	18	110	84	13	97	91.3	72.2	88.2	63/80	42/43
第96回 平成14年	第19期生 97名	97	13	110	93	9	102	95.9	69.2	92.7	33/80	21/43
第97回 平成15年	第20期生 89名	89	7	96	81	4	85	91.0	57.1	88.5	54/80	31/43
第98回 平成16年	第21期生 101名	101	11	112	96	6	102	95.0	54.5	91.1	32/80	21/43
第99回 平成17年	第1期生 98名	98	10	108	92	5	97	93.9	50.0	89.8	45/80	26/43
第100回 平成18年	第2期生 99名	99	10	109	90	7	97	90.9	70.0	89.0	53/80	30/43
第101回 平成19年	第3期生 90名	90	12	102	83	5	88	92.2	41.7	86.3	55/80	35/43
第102回 平成20年	第4期生 88名	88	13	101	81	5	86	92.0	38.5	85.1	71/80	41/43
第103回 平成21年	第5期生 90名	90	13	103	82	8	90	91.1	61.5	87.4	67/80	40/43
第104回 平成22年	第6期生 90名	90	14	104	82	8	90	91.1	57.1	86.5	65/80	42/43
第105回 平成23年	第7期生 97名	96	13	109	89	7	96	92.7	53.8	88.1	55/80	32/43
第106回 平成24年	第8期生 93名	92	15	107	87	9	96	94.6	60.0	89.7	51/80	25/43

回数及び 実施年	卒業生	受験者			合格者			合格率			総合 順位	国立大学 順位
		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計		
第107回 平成25年	第9期生 88名	名 88	名 12	名 100	名 70	名 6	名 76	% 79.5	% 50.0	% 76.0	79/80	43/43
第108回 平成26年	第10期生 101名	99	22	121	89	16	105	89.9	72.7	86.8	73/80	42/43
第109回 平成27年	第11期生 100名	100	19	119	94	8	102	94.0	42.1	85.7	76/80	42/43
第110回 平成28年	第12期生 109名	109	15	124	102	7	109	93.6	46.7	87.9	71/80	40/43
第111回 平成29年	第13期生 115名	114	15	129	107	10	117	93.9	66.7	90.7	36/80	23/43
第112回 平成30年	第14期生 104名	104	13	117	99	7	106	95.2	53.8	90.6	49/80	25/43
第113回 平成31年	第15期生 112名	112	10	122	105	6	111	93.8	60.0	91.0	40/80	19/43
合計	3,486名	3,477	393	3,870	3,235	232	3,467	—	—	—	—	—

◆保健師・看護師国家試験合格状況

卒業生	保健師										看護師									
	回数及び実施年	受験者			合格者			合格率			回数及び実施年	受験者			合格者			合格率		
		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計
		名	名	名	名	名	名	%	%	%		名	名	名	名	名	名	%	%	%
第1期生 62名	第88回 平成14年	62	—	62	47	—	47	75.8	—	75.8	第91回 平成14年	51	—	51	50	—	50	98.0	—	98.0
第2期生 73名	第89回 平成15年	73	12	85	71	10	81	97.3	83.3	95.3	第92回 平成15年	62	1	63	60	1	61	96.8	100.0	96.8
第3期生 66名	第90回 平成16年	66	1	67	66	0	66	100.0	0.0	98.5	第93回 平成16年	56	2	58	53	1	54	94.6	50.0	93.1
第1期生 64名	第91回 平成17年	64	2	66	60	0	60	93.8	0.0	90.9	第94回 平成17年	54	4	58	54	3	57	100.0	75.0	98.3
第2期生 74名	第92回 平成18年	74	3	77	57	2	59	77.0	66.7	76.6	第95回 平成18年	64	1	65	62	0	62	96.9	0.0	95.4
第3期生 66名	第93回 平成19年	66	11	77	65	11	76	98.5	100.0	98.7	第96回 平成19年	57	3	60	57	1	58	100.0	33.3	96.7
第4期生 68名	第94回 平成20年	68	3	71	67	2	69	98.5	66.7	97.2	第97回 平成20年	58	2	60	57	1	58	98.3	50.0	96.7
第5期生 69名	第95回 平成21年	69	1	70	68	1	69	98.6	100.0	98.6	第98回 平成21年	59	2	61	58	1	59	98.3	50.0	96.7
第6期生 64名	第96回 平成22年	64	—	64	60	—	60	93.8	—	93.8	第99回 平成22年	55	1	56	54	0	54	98.2	0.0	96.4
第7期生 73名	第97回 平成23年	72	4	76	70	2	72	97.2	50.0	94.7	第100回 平成23年	64	2	66	64	1	65	100.0	50.0	98.5
第8期生 66名	第98回 平成24年	66	2	68	65	2	67	98.5	100.0	98.5	第101回 平成24年	58	1	59	58	1	59	100.0	100.0	100.0
第9期生 65名	第99回 平成25年	65	2	67	65	2	67	100.0	100.0	100.0	第102回 平成25年	57	—	57	54	—	54	94.7	—	94.7
第10期生 71名	第100回 平成26年	70	—	70	68	—	68	97.1	—	97.1	第103回 平成26年	61	3	64	58	2	60	95.1	66.7	93.8
第11期生 72名	第101回 平成27年	72	2	74	72	2	74	100.0	100.0	100.0	第104回 平成27年	63	4	67	60	4	64	95.2	100.0	95.5
第12期生 70名	第102回 平成28年	54	1	55	54	1	55	100.0	—	100.0	第105回 平成28年	60	3	63	58	2	60	96.7	66.7	95.2
第13期生 66名	第103回 平成29年	42	—	42	39	—	39	92.9	—	92.9	第106回 平成29年	56	3	59	56	3	59	100.0	100.0	100.0
第14期生 64名	第104回 平成30年	36	2	38	32	1	33	88.9	50.0	86.8	第107回 平成30年	58	0	58	58	—	58	100.0	—	100.0

◆保健師・看護師国家試験合格状況（続き）

卒業生	保健師										看護師									
	回数及び実施年	受験者			合格者			合格率			回数及び実施年	受験者			合格者			合格率		
		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計
第15期生 65名	第105回 平成31年	名 39	名 3	名 42	名 38	名 2	名 40	% 97.4	% 66.7	% 95.2	第108回 平成31年	名 60	名 0	名 60	名 60	名 −	名 60	% 100.0	% −	% 100.0
1,218名	合計	1,122	49	1,171	1,064	38	1,102	−	−	−	合計	1,053	32	1,085	1,031	21	1,052	−	−	−

◆助産師国家試験合格状況

修了生	助産師									
	回数及び実施年	受験者			合格者			合格率		
		新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計
第1期生 6名	第96回 平成25年	名 6	名 −	名 6	名 6	名 −	名 6	% 100.0	% −	% 100.0
第2期生 3名	第97回 平成26年	3	−	3	3	−	3	100.0	−	100.0
第3期生 6名	第98回 平成27年	6	−	6	6	−	6	100.0	−	100.0
第4期生 6名	第99回 平成28年	6	−	6	6	−	6	100.0	−	100.0
第5期生 3名	第100回 平成29年	3	−	3	2	−	2	66.7	−	66.7
第6期生 3名	第101回 平成30年	3	1	4	3	1	4	100.0	−	100.0
第7期生 4名	第102回 平成31年	4	−	4	4	−	4	100.0	−	100.0
31名	合計	31	1	32	26	1	27	−	−	−

※総合人間自然科学研究科修士課程看護学専攻母子看護学分野・実践助産学課程のみの数

編集後記

本号から令和時代の“おこうだより”となります。編集委員一同、気持ちを新たにし、医学部からのお便り“おこうだより”をお届けして参りますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

本号では例年より多くの「新任教授紹介」が掲載され、驚かれた方も多いのではないでしょうか。非常に優秀なリーダーたちが加わり、教育、研究、診療、地域貢献など多分野において医学部の更なる発展が期待されます。また、新病棟や基礎研究棟、大学院棟などの再開発も進んでいます。OB・OGの皆様、ご来高の際は是非医学部にお立ち寄り下さい。南風祭は学生達の積極的な運営で行われています。我々教職員も何かと楽しみしているのですが、昨年は台風の影響で一日のみの開催となり少し残念でした。南風祭は学生達の普段の姿を垣間見たり、医学部の雰囲気を感じたりできる良い機会です。次回は10月17日（土）と18日（日）に開催予定です。ご父兄の皆様も是非一度お越し下さい。

中国武漢で発生した新型コロナウイルスが大きな社会問題となっています。非常事態に対する備えを疎かにしてきたと言わざるを得ない状況です。共働きである我が家でも子供達の突然の休校を知り、右往左往・・・。こちらが望まなくても襲ってくる敵？がいることを改めて認識しました。これを機会に国や地方自治体、地域社会、家族、個人の各レベルで非常事態に対する対応と心構えを考えておく必要があるでしょう。

最後になりましたが、お忙しい中、原稿を執筆していただいた方々、編集委員の方々、学生課職員の方々に厚くお礼申し上げます。

おこうだより編集委員会委員長
古宮　淳一

編　集　古宮　淳一、降幡　睦夫、小林　道也、井上　啓史、阿波谷敏英、
山﨑　直仁、今村　　潤、下元　理恵、竹村　多加
発　行　高知大学医学部おこうだより編集委員会
所在地　高知県南国市岡豊町小蓮　TEL(088)866－5811(代)
発行日　令和2年3月
印　刷　有限会社 三宮印刷　TEL(088)833－3412